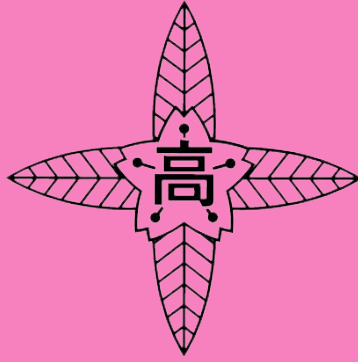




克己

平成23年 3 月

日本大学三島高等学校柔道部
創 部 50 周 年 記 念

ご 挨拶

新春の候、皆様には益々御健勝のこととお喜び申し上げます。

日頃は日本大学三島高等学校柔道部に多大な御厚情を賜り誠に有り難く厚くお礼申し上げます。

さて、お陰をもちまして我が柔道部もこの度創部五十周年を迎えることができました。

この節目の年に過去の記録の一部と思い出などを集録し、外部の皆様に対するものでなく日大三島の道場で共に汗を流した指導者と卒業生のための記念誌を編集いたしました。

尚、これを機に一層努力邁進する所存でございますので、今後共何卒よろしく御指導御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月吉日

日本大学三島高等学校柔道部
OB会長 加藤 裕康

日本大学三島高等学校柔道部 創部50周年記念誌

目 次

No.	項 目	P	No.	項 目	P
1.	目次		36.	第22期生	…34
2.	イメージ		37.	第23期生	…35
3.	日本大学校歌・日大三島校歌	…1	38.	第24期生	…36
4.	部員心得	…2	39.	第25期生	…37
5.	日本大学応援歌	…3	40.	第26期生	…38
6.	50周年挨拶 校長：仁藤 芳治	…4	41.	第27期生	…39
7.	50周年挨拶 部長：土田 信明	…5	42.	第28期生	…40
8.	50周年挨拶 監督：水口 透	…6	43.	第29期生	…41
	〈以下、30期生までは創部30周年誌より編集〉		44.	第30期生	…42
9.	30周年時の挨拶 北岡 功	…7	45.	第31期生	…43
10.	30周年時の挨拶 西島 外美雄	…8	46.	第32期生	…44
11.	〃	…9	47.	第33期生	…45
12.	30周年時の挨拶 及川 直躬	…10	48.	第34期生	…46
13.	30周年時の挨拶 富田 実	…11	49.	第35期生	…47
14.	30周年時の挨拶 玉井 完一	…12	50.	第36期生	…48
15.	第1期生	…13	51.	第37期生	…49
16.	第2期生	…14	52.	第38期生	…50
17.	第3期生	…15	53.	第39期生	…51
18.	第4期生	…16	54.	第40期生	…52
19.	第5期生	…17	55.	第41期生	…53
20.	第6期生	…18	56.	第42期生	…54
21.	第7期生	…19	57.	第43期生	…55
22.	第8期生	…20	58.	第44期生	…56
23.	第9期生	…21	59.	第45期生	…57
24.	第10期生	…22	60.	第46期生	…58
25.	第11期生	…23	61.	第47期生	…59
26.	第12期生	…24	62.	第48期生	…60
27.	第13期生	…25	63.	第49期生	…61
28.	第14期生	…26	64.	第50期生	…62
29.	第15期生	…27	65.	第51期生	…63
30.	第16期生	…28	66.	第52期生	…64
31.	第17期生	…29			
32.	第18期生	…30			
33.	第19期生	…31			
34.	第20期生	…32			
35.	第21期生	…33			

表 紙…克己

裏表紙…柔

日本大学校歌

相馬御風作詞

山田耕作物曲

一、日に日に新たに文化の華の
さかゆく世界の眩野の上に
朝日と輝く国の名負ひて
巍然と立ちたる大学日本
正義と自由の旗標の下に
集る学徒の使命は重し
いざ讃へん 大学日本
いざ歌はんわれらが理想

二、四海に先んじ 日いつる国に
富嶽とゆがぬ 建学の基礎
学ある歴史の道一すじに
向上やまよひ 大学日本
治世の一念 焰と燃ゆる
われらが行く手の光を見よや
いざ讃へん 大学日本
いざ歌はん われらが理想

日本大学三島高等学校校歌

高梨公之 作詞
貴島清彦 作曲

一

奥白き富士の 嶺を負いて
花咲きほこる 三島路に
聳えて高き わが母校
師弟集いて燃ゆる血に
理想の星を目標さなん
ああ 日大三島
われらに栄え あれ

三

山紫に湧き出する
正義の泉 智慧の水
汲みてつちかう 青春の
夢その時に及びなば
大空高く描かなん
ああ 日大三島
ゆくてに栄え あれ

二

三つの国寄る 要衝に
築きし歴史 千余年
伝統担いて 学の道
心を磨き身を鍛え
日に日新たに進みなん
ああ 日大三島
その名に栄え あれ

四

掲ぐる旗は わが自立
世界に開く 広き視野
人類ここに 手を組みて
平和の鐘を打ち鳴らす
世紀の望み遂げましや
ああ 日大三島
字内に栄え あれ

部員心得

一日大三島高校柔道部の誇りをしるすの
胸に抱いて行動せよ。

一 礼儀を重んじ部員相互の親和を図る事。

二 素直な心で柔道に取り組む常に練習に励む。

三 練習は己れのすべてを技に打ち込んでやる事。

四 立技寝技は車の両輪の如し一方に偏するな。

五 撮影に注意して練習を怠るな。

六 打ち込めば力通る線返し其の技を早く習得

せよ。

七 作りと掛の体得引き手は思い切って。

八 寝技の入り方は敏速に押え方はじっくりと。

九 技を掛けるときは押えろときは絶対にはかすな。

日本大学

日本大学応援歌

(花の精鋭)

東 辰三 作詞
明本京静 作曲

一、輝く伝統母校の為に
栄誉担って今闘く
花の精鋭日大健児
フェアプレイ日大
立て おて 勝て
勝利微笑む花の日大

二、輝く太陽燃え立つ意気に
紅い襟袖も味も誇る
花の精鋭日大健児
フェアプレイ日大
立て おて 勝て
勝利微笑む花の日大

三、輝く瞳にみまもる闘志
あたりはらって咲きまをり
花の精鋭日大健児
フェアプレイ日大
立て おて 勝て
勝利微笑む花の日大





連綿と伝統リレー、柔よく剛を制す「克己」

日本大学三島高等学校 校長 仁藤 芳治

本校の柔道部の歴史は長く、深く、高く、教育の理想のもとに育まれました。しかも、一本の黒帯の如く、「克己」の精神が固く受け継がれ、現在に至ります。その歴史が、創部五十年の節目にある事に、心底、敬意を表します。そして、本校教師の一員として、柔道部の活躍の歴史に、強い誇りを禁じ得ないものであります。長きに亘り、柔道部の育成に関わって来られた指導者の先生方、そして、良き青春時代に柔道を通じて多くのものを学び、今や社会で活躍されております卒業生の皆様方、連綿と伝統を受け継いで来られたご努力に尊敬の念を捧げます。

さて、もとより柔道は門外漢の私ではありますが、その奥深さは日本発祥の武道として、今や世界各地でスポーツとして取り入れられ、発展するところでもあります。日本人は、古来、武道としての心構えを持っていました。それは礼節を含む、心の在り方の修行でもありました。そして、常にあるべきは「己」でありました。ですから、道場の正面には、「克己」の書が、正面に厳しく正対しているのです。勝つ為には、技術も必要でしょうが、それは、相手の力を活用する、または相手の力を殺ぐことでありましょう。そして、その相手の心や動きを読む為には、自らの心を読まねばなりません。それは、「己に克つ」と言う事に尽きるのでしょうか。自らの心に向き合い、流れるように相手の動きに逆らわず、相手の力を活用します。

門外漢の私が一人合点な事を云っては、その道の達人にお叱りを受けてしまいそうです。しかし、一言、教育の面から捉えると、そのように考えれば、それはそのまま、教育の真髄に合致するものではないでしょうか。教育では、そうあらねばならないことを確信するのです。「己に克つ」、それは、「自分の敵は、自分です。」というフレイズと同じく意味するものであります。また、柔道には、個人戦と団体戦があります。これは、チーム競技としての心理作戦は、生きる知恵にも通じ、奥深いものがあります。個人で挑戦する場面、チームを組んで挑戦する場面、両輪が揃って、真の人間性が育つと信じているのです。

有為の青年が、柔道を通じて、大きく育ちました。幾多の卒業生を輩出された指導の先生方に、改めて敬意を表するとともに、今後の柔道部の活躍を心より祈念いたします。最後に、柔道と教育の真髄として、次の言葉を紹介致します。

受け身 相田みつを

柔道の基本は 受け身

受け身とは ころぶ練習 まける練習

他人の前にぶざまに 恥をさらす稽古

受け身が 身につけば達人

まけることの尊さが わかるから

教育の場における柔道の精神は、以て、人間教育指導の精神に通じるものであることを記して、今後の本校教育の要とすべく、期待するものであります。

「克己」こそが、人間として越えねばならない鍛錬の道、柔道の道であります。



ご挨拶

日本大学三島高等学校 柔道部部长 土田 信明

日本大学三島高等学校柔道部創設五十周年の記念すべき年を迎え、今までご指導くださった及川先生、西島先生、富田先生、石巻先生そして現役の水口先生の諸先生方には大変有難うございました。

柔道の専門家でない私が、この立場でここに一筆献載できることは恐縮ではありますが、同時に喜びと思います。

一度柔道部顧問を退いた私が7年前から再び顧問として、監督として道場に足をはこぶようになったとき、身の引き締まる思いがしました。それは、初代監督西島先生の教えを受け継げるだろうか、伝統を守るだろうかと思悩んでいました。しかし、ただ蕩尽するだけでなく、更に向上・発展させるべく努力することが今後の日大三島高校柔道部においては大切なことであると思いました。

柔道の創始者 嘉納治五郎先生の「精力善用 自他共栄」の言葉を実践すべく、毎日の稽古で、これでもかというところまで追い込み、そこから得た技に喜びを感じる。傍から見ると一種別世界のように思えるかもしれない。そんな努力を日々重ね、体力・技術そして精神をつくっていくのが柔道です。本校柔道部も創設五十周年を迎え、幾百人もの生徒が柔道場の畳に汗して頑張ってきました。五十年の伝統である。いや、これからも日大健児魂で続くことであろう。ところで、「松の盆栽は元気だろうか」三十周年記念誌の挨拶に載せた私の一言でした。

ここしばらくは「全国」という言葉が遠く感じられていた。全国大会に出場するたびに盆栽の手入れが疎かになると嘆いていた西島先生のことを思い出します。五十年の節目の年に個人ではありますが、春の選拔選手権で全国5位、また沖縄で行われたインターハイ全国大会にも出場した生徒が出たことは大変嬉しく思います。

これからも、より一層発展する日大三島高校柔道部のために微力ながら携わっていくつもりです。現役の部員、OB、父兄、関係者の皆様、今後も一致協力した体制を切に宜しくお願ひ申し上げます。



ご挨拶

日本大学三島高等学校 柔道部監督
(本校柔道部34期生)

水口 透

日頃は日本大学三島高等学校柔道部に対し、様々な形でご支援・ご協力して下さり、誠にありがとうございます。創部五十周年という素晴らしい節目の年に監督という形で母校柔道部に携わせていただいていることを、大変嬉しく思っております。またその反面、輝かしい功績を残された諸先輩方がいる中、実績の何もない私ごときが監督という重責を務めさせていただいていることに、常々恐縮している限りであります。

戦績につきましては29期生以降団体戦での全国大会への出場を逃し続けている状況であります。私が土田監督のもと、コーチ（非常勤講師）として本校に赴任した年、部員は5名しかおらず、夏の工藤杯東部高校柔道選手権大会では東部大会ベスト16という屈辱の結果からのスタートでした。「何とかしなければ・・・」その一心で少ないながらも一生懸命素直な気持ちで柔道に向き合う部員たちと共に、土田監督と二人三脚で稽古に励みました。毎年思うように部員は集まらず、半分以上が帯の締め方から指導するという状況でした。しかし、そんな状況の中、年を追うごとに意識が変わってきました。昔では考えられませんでした。が、ほぼ自由だった髪型も49期生から昔のように全員がそろって丸刈りにするようになり、結果も少しずつですが出てきました。そして今年度、50期生主将である石井都百希（長岡中出身）が8年ぶりにインターハイに出場、更に春の高校柔道選手権では22年ぶりに全国大会での入賞という結果を残してくれました。個人戦とはいえ、久しぶりに新聞で「日大三島柔道部」の存在をあらわすことができたことをうれしく思います。石井本人の努力はもとより、部員全員の協力、そして保護者・OBの方々、更には幼少の頃より石井の面倒を見ていただいた長岡柔道会の先生方のご指導・ご協力があったからこそこの入賞だったと思います。この久しぶりの全国大会への出場を機に更に飛躍していき、団体戦で全国に今一度「日大三島柔道部」の名をとどろかせたいと思っております。現在部員は3年生が引退した為、10名と少ないですが素直な心で一生懸命日々努力しております。ぜひ、道場へ足をお運びください。私自身若輩者で本当にまだまだ未熟ですが、母校愛と研究心そして強い信念を持って、西島先生をはじめとする先代監督の先生方の築かれた輝かしい戦績に少しでも追いつき、追い越すことができるよう誠心誠意、日々努力していく覚悟であります。今後とも格別なるご指導・ご協力の程、よろしくお願いいたします。

創部五十周年にあたり私より31期生以降の柔道部の主だった戦績、そして現在の状況を紹介させていただきます。

31期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト8
32期：新人戦県第3位・高校総体県第3位・東海大会出場
個人戦全国高校総体95kg以下級出場 西條邦彦
33期：新人戦県準優勝・高校総体県準優勝・東海大会出場
個人戦全国高校総体60kg以下級出場 伊東正治
国民体育大会86kg以下級出場 仲田剛
34期：新人戦県第3位（1年生大会優勝）・高校総体県ベスト8
個人戦全国高校総体60kg以下級出場（東海大会優勝） 朝波清治郎
35期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト8
36期：新人戦県出場・高校総体県出場
37期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト16
38期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト16
39期：新人戦県ベスト16・高校総体県出場
40期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト16
41期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト8
42期：新人戦県第3位・高校総体県ベスト8
個人戦全国高校総体81kg以下級出場 室伏弘己
43期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト16
44期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト16
45期：新人戦県ベスト16・高校総体県出場
46期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト16
47期：新人戦県ベスト16・高校総体県ベスト16
48期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト8
49期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト16
50期：新人戦県ベスト8・高校総体県ベスト8
個人戦全国高校柔道選手権81kg以下級第5位入賞
全国高校総体81kg以下級出場 石井都百希



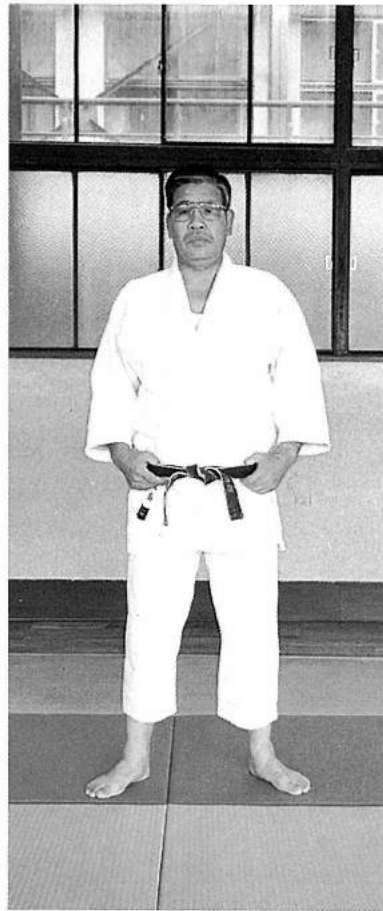
「今ふたたびの全国制覇を」

日本大学三島高等学校 校長 北岡 功

本校創設三十二年の歩みを、一〇年一昔のいわれに従って前・中・後期に分けた場合、わが柔道部は前期の昭和四十一年の国体において、その主力選手をひっさげて全国優勝の栄冠を静岡県にもたらしている。これを含めて、本校運動部が全国制覇を果たした数は八部に及ぶが、この間、創部以来コンスタントに県優勝を続け、全国大会に最多出場、以て今ふたたびの全国の王座を虎視眈々と狙う同部の不退転の伝統と、その心勢いに対し、深甚の敬意と期待を馳せるのは、けだし私一人ではないだろう。かてて、(我田引水を越えて)私がここに推奨申し上げたいことは、この灼爍たる歴史を達成し来たった各期のOB諸君のすべてが地元出身であるという紛れなき事実を見落とすたくないことである。勿論、そこに課せられた、千日の稽古を鍛とし、また万日の稽古を錬とする、たゆまぬ精進の跡を容易にうかがうことが出来るわけである。勝つてはその緒を締め、負けては臥薪嘗胆の誓いを泪の中に立てられたことをも、折りにつけ見聞したことである。重は重なりに、軽は軽なりに、その乾坤一擲の捨身の工夫が一再ならず功を奏したことをも、これ偏えに師弟一体の心の絆が見事、開花したものとして他部の挙げて模範としているところである。

たがいに傷つき、なお斗うことを休まず成長して行く、とは格闘競技の命運・名分には違いないが、昨今、私の耳にするところは地元選手すらも分散・拡散の状況の由、まこと遺憾に堪えない。なにとぞOB各位を中心に名伯楽の労をおとり下され、格闘競技の心を心とし、なお同部の伝統を傷つきながらも守成しつづける同部名將の許に、その命運をお託し下されますよう心よりお願い申し上げ、私の本意の一端を述べさせて頂いた次第である。

「柔道三十年記念誌によせて」



御挨拶

日本大学三島高等学校 柔道部監督 西 島 外美雄

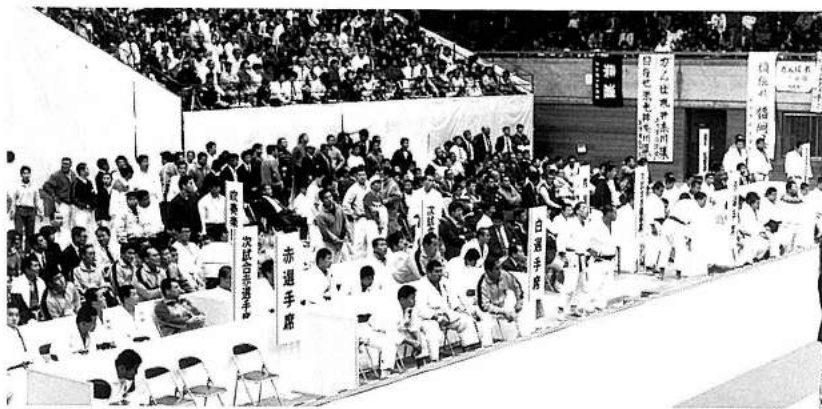
皆様のご指導とご鞭撻のお陰で、三十年間、好きな柔道をやらせていただきました。ふりかえればあつという間のようでしたが、やはり大変長く感じました。今まで、一日たりとも気持ちの上で柔道のことを忘れた時はありません。常に、部員のこと・彼の技をどうするか・生活の乱れはどこにあるのか、と悩みました。しかし、技をマスターしてくれた時や、乱れからの立ち直りの良かった時はうれしいものでございます。また、試合で、作戦がピタリと当たり優勝した瞬間は、「ああやっていて良かった。」とつくづく感じました。この気持ち、また明日からの稽古のみなものになります。

柔道は、私にとって良薬の麻薬にも似ております。大試合ほど、全身が怖さと緊張で乱れ、試合への作戦が一度に身体と頭をつっぱらせます。この、選手たちと一緒に考え緊張する時間を共有し、そして試合の終わった時のけだるさは、ことばには言い表せないほどのものであります。

こうしてせっかくなじんだ生徒も、二年半で引退してしまいます。私はいつも、ひとり取り残された落第生のように苦笑して、生徒に語ります。

三十年の歩み

一、柔道部の始まり



昭和三十四年、日本体育大学体育学科卒業、柔道部出。
翌三十五年四月、日大三島高校に奉職。四月から柔道部顧問に就任。一年間は同好会として指導。時に、大学の文系の予科と岩手医大の一、二年生の柔道部員二十名、高校一、二年で三十名。四十歳まで稽古を始めた。
三十六年、部に昇格。時の主将、石原重則。一年生から三年生まで揃い、部員数四十名。県内の対外試合出場を認められる。
こうして、三十年の伝統の基が始まりました。
二、年間の大会・試合
四月 柔道祭東部大会。
五月 柔道総体、体重別個人・新人体別地区予選・東部予選。
六月 高校総体団体戦。国体少年体重別・新人体別東海高校総体、個人・団体。柔道祭県大会。
七月 体重別国体少年選抜個人。
八月 全国高校総体。競技力向上柔道練成会。
九月 国体少年の部。
十一月 全国高校柔道選手権(東部)。全日本新人体重別選手権。全日本新人体別選手権。
一月 全国高校柔道選手権、無差別・団体(県)。
三月 全国高校柔道選手権、無差別・団体(全国)。
他に、
七月 金鷲旗福岡国際会館(本校が全国的な実力の時のみ)。
八月 東部選手権(個人・団体)。
九月 全日本大学付属高等学校大会。
十月 東海大学主催黒潮大会。
三月 天理名門大会(天理市)。
年間の試合数が多く、勝ち進めば、東部予選から県・地区・全国大会まで進みます。
三、過去の優秀選手

四期 内海隆治・美尾年宣
五期 山下富雄・佐野雅美
六期 伊藤善雅
十期 菊地勝彦
十一期 水上雄士

十三期 芹沢秀吉・高梨重範

十六期 米山安基夫・平田初年

十七期 黒田英樹

二十五期 秋山勝彦・川口善靖・丸川岳浩

二十八期 菊地傑

二十九期 木村善一

その他数々の思い出に残る選手たちの、闘志と巧技が、私を助け、本校の柔道部の伝統を築いてくれました。

四、思い出に残る試合

多々思い出に残る試合がありますが、個人戦・国体・インターハイの三つの特に思い出深い試合をあげます。

1 個人戦

その年に限り、オリンピックが十月にあるので、国体がI・Hより早く、新潟県加茂市で行われた。

I・H重量級県大会では、多分東海一高の深沢君（現在東洋大柔道部監督）と本校の内海隆治君の決勝であることは、間違いないと思っていました。

国体が終わると、深沢君はI・Hに備え直ちに清水へ帰りましたが、わが内海君は父親と佐渡観光にでかけてしまい、私はひとり気をもんだものでした。

四日後のI・Hは、案の定、双方共決勝まで進んだ。試合は技有り以上、一回戦引分け、二回戦も引分け、三回戦は二分頃、内股一本勝ちで優勝。試合前、彼の腕はパンパンに張り、足もつっぱり、ただ気迫だけでした。私は彼に、「君は、練習量では、県内のだれにも負けていない。自信を持って戦え。」と言って私は彼の腕を揉み、指示を与えた。実に見ごたえのある試合だった。また、実に気疲れのした試合でもありました。

試合後、お父様が、息子に勝ってほしいので朝早く起き、先祖の墓参りをしてから試合場へ向かって、よかったと、話されたお喜びの顔が思い出されます。

2 選抜（団体戦）武道館

前年の選抜の試合は天理高校に敗れ、本校はベスト八に終わったが、今年はその時の選手のうち、秋山・川口・小井出の三人が残っており、全国での前評判も三位と良く、選手たちもその気で上京し武道館入りした。

予選を勝ち抜き、相手側より勝ち進んで来るのは神奈川（東海大相模）と予想していたところ、昨年勝ち抜いた福岡大濠高であった。本校は近大福山高に小差で勝ち、次の作戦を立てようと、意気揚々と控え室に戻ると、選手全員が過去に非常に明るい顔をして、大濠高はいたできと万歳をしていた。本校のチームでこのような動作をする子供たちは過

去にはなかったと私は思った。そして、良い具合に試合がのってきたなと思い、決勝対決となるはずの世田谷高との作戦も練った。昨年のI・Hでは世田谷高を破っている。ひそかに優勝の意識を抱いた。

ところが先鋒から納得のいかない負け方で秋山まで来た。秋山は三人を抜き、四人目で引分けた。しかし大将戦が大内刈りの一本負けで、ついに大濠高に敗れてしまった。勝てるという油断が、勝ちを逸したのである。勝つことの難しさをまた勉強させていただきました。しかし、気持ちには実にさわやかな思いで武道館を出、バスで三島に戻った。

3 熊本I・H（団体戦）

試合は予選を順調に勝ち進み、決勝トーナメント一回戦もよく戦い、いよいよ準々決勝に駒を進めた。対戦相手は鹿児島実業で、名門の鹿児島商業を下し意気盛んであった。西郷隆盛の如き体格で、良く鍛えあげられた選手たちだった。私は自分の顔が次第に興奮のため充血していくのをいかんともしがたく、ただただ「落ち着け！」と心に言い続けた。生徒たちにそれぞれ自分の相手を教えると、闘志満々の意気を感じられ、「これはいけるぞ」と期待して試合に臨んだ。

試合は開始され、先鋒は上四方固めで一本負け、次鋒は引分け、中堅は左体落し技有り勝ち、副将は軽く一本勝ちし、勝負は大將戦に持ち込まれた。双方とも身長百八十、体重百キロ前後の巨漢同士。技は左大外刈りの喧嘩四つ。これなら引分けができる。五分間逃げ切り引分け作戦（現在の試合法では注意が取られるところ）

試合は進みラスト十秒を告げた。私は、勝ったと選手から目を離し、次の戦いを脳裏に、半身で腰を上げた。その瞬間、場外ぎりぎりでも大外刈りが一、二度、ああ危ない！「一本」と主審の声と同時にベルの音。急に目の前が暗くなり、声も出ない。脱力感の増した腰を引きずるように館外に出た時、選手たちが大粒の涙で抱きつかれ、初めて負けを実感した。最後の最後まで勝負を捨てるなど生徒に指導しておきながら、ラスト十秒で目を離した私の油断・不注意・審判への甘え、これが悔やまれて残念でならない。

終わりに

近年、高校のスポーツにおいて、勝つためには手段を選ばずの風潮が見え、顔をしかめずにはいられません。

心身の健全な育成を期すべき高校部活動に学費や大学入学等の打算的好餌をもって選手を勧誘して、はたして郷土愛や母校愛が生まれるであろうか。スポーツの真髄も精神修養も程遠い気がしてならないのです。

私は、これまでそうして来たように、これからの生涯も、柔道を通して、若者たちの教育に、微力ながらも携わって行くつもりです。どうか、今後もお一層のご協力を賜りたく、お願いいたします。



御挨拶

及川 直躬

本日ここに日本大学三島高等学校柔道部創設三十周年の記念すべき日を迎えましたことは誠に喜びに堪えません。私が赴任致しましたのは昭和三十七年四月で、以来四十七年三月までの十年間に亘り、微力ではございますが、西島先生と共に指導に携る機会を得て、数々の貴重な体験をさせて頂きましたことは私の生涯忘れることの出来ない良き思い出であります。期も熟し着任二年目にして、柔道部第一期黄金時代を迎え、昭和三十九年県下初優勝、続いて四十年、四十一年と三年連続I・H出場を果たし、全国高体連表彰を受け今日の輝やかしい伝統の礎が築かれたのであります。その後の活躍も目覚ましく、度々I・H、全国高等学校柔道選手権大会に出場、全国に日大三島高校の名を轟かせ、県下有数の柔道名門校として発展して参りました。

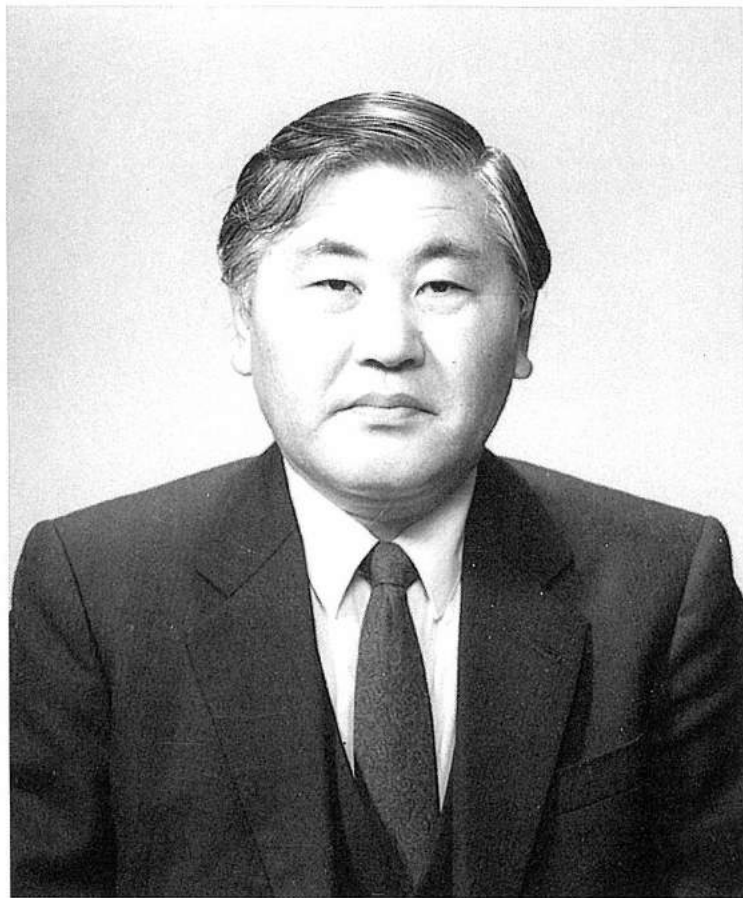
これも西島先生の御指導の賜であり深く敬意を表します。高校在職十年の過去を懐しく振り返ってみると、まず第一期黄金時代のこと、走馬灯の如く鮮明に思い出されて来ます。全盛期の頃は部員も一学年二十名位、六十名もの大所帯で、練習は厳しく特に選手も大型化して来た時代でもあり、部員諸君の苦勞は大変で、夏合宿、他校との合同合宿等、本部から派遣された大学生コーチをはじめ、多数のO・B諸君を交えての稽古は熾烈を極め壮観でありました。しかし合宿を終え、打ち上げ納会での部員の寛いだ笑顔等、忘れることは出来ません。昭和三十九年I・H出場決定県大会、七分三分で日大絶対有利でも、初優勝は楽には勝たしてくれない、然し選手達は全力を尽し戦い、ついに夢にまで見たI・H初出場の栄冠を勝ちとったのです。その後三年連続出場と県下に敵なく誠に充実した時代でありました。忘れもしない、二度目出場の熊本大会、ベスト四進出を賭け、準々決勝に駒を進め、強豪鹿児島実業高等学校（今大会優勝校）と対戦、接戦の末僅差で敗れ、無念の涙を流した悔しさ、三度目出場、青森大会では、出場回数を誇る名門北海道高等学校と対決、白帯ながら寝技の強いこと、唯啞然とするばかりであり惜敗、その強さに驚いたものです。又東海四県大会では連続十数回優勝と勝ち続ける。名門東海高等学校を敗り東海四県を初制覇、念願の優勝旗を手にしたこと等深く印象に残る思い出であります。これら良き思い出の中で近年残念でならない悲しいことは、この一時代を築き上げた若きO・Bが続けて急逝されたことです。今日この良き日を共に喜び合うべき教え子も今は亡く、痛恨の極みであり、在りし日の勇姿が目には浮び寂しい限りです。最後に今日ここに三十周年の記念すべき良き日を迎えることの出来たのも一重に学校当局の御理解、後援会、O・B会各位の御支援、部長、監督の御指導並びに現役諸君の御協力の賜であり、この輝やかしい伝統と歴史が築かれたものと確信します。今後益々の御活躍を心から祈念し御挨拶と致します。



御挨拶

富田 実

本校柔道部三十周年おめでとう御座居ます。創部以来部をご指導頂いた及川先生、西島先生、土田先生には心からご苦勞様を申し上げますと同時に、陰に陽に部をご支援下さいましたOBの諸兄、ご父兄各位には、厚く御礼申し上げます。さて、私は柔道の柔も知らずに昭和六十一年より部の顧問を引き受け現在に至っております。顧問を引き受けたいきさつは、秋山君、川口君等に担任として、また教科担任として、三年間親しく接し、その成長を監督以上に楽しんだ時がありました。そんなことが要因です。四月、張切って道場に顔を出したのはいいが、監督の気合の入った掛声とは裏腹に、ぼさっと稽古を見ているのは苦痛でした。そんなことで、事務的なことに専念させてもらいました。日本古来の武道ですから、伝統的なしきたり等があり、納得のいかないことも多く、戸惑を感じました。夏の北陸遠征で、行動を共にし、柔道の厳しさ、指導の難しさが理解出来たような気がします。遠征中、怪我した主力選手に、監督は、たいしたことはいや、といとも簡単に説明しておりました。また、六、七時間かけて応援に来られたご父兄には頭の下がる思いでした。教員生活二十数年、実績の無い世界では、無です。ですからその後、試合、遠征には、必ず参加して、目で、耳で理解することに努めました。練習の成果がでて、チームは力をつけ、果上位にランクされましたが、春の大会、夏の大会と勝てませんでした。監督は常に心、技、体を強調しており、その一つが欠けてもバランスが崩れてしまうことを、何度も話されました。どうも、そんな年であったような気がします。六十二年の夏、中京大学での遠征合宿、道場での百数十人の合同合宿、おせじにも旨いとは言えない食事、贅沢に慣れた私には、辛い一言、だが、部員は、もくもくと練習に励んでくれました。十二月の天理遠征では、Aチーム中上位の実績を残し、その自信が六十二年春の選抜大会、個人、団体とも優勝につながり、会場で胸上をして頂き、体も心も宙にまい上がりしました。過去において、卓球部の時一度、囲碁将棋部で六度、バレー部で一度全国大会に参加しましたが、その時とは、別な意味で感激がありました。三月の選抜大会には、関係者として会場入りしたわけですが、その準備段階で関係各位に大変お世話になりました。結果も団体ベスト八位ということまで面目を保ちました。団体では、五人選手が揃わないと勝てないと言われる通り、夏の大会は、五人目が狙われる羽目になり、出直します。大型選手が揃った今度のチームに監督は大きな期待を寄せておりました。従来にない熱の入れ方で厳しい指導が続き、平成元年の春、昨年に引き続き、個人、団体で優勝し、選抜大会に臨みましたが、個人で木村君がベスト八位、団体は二回戦負け、期待されたわりには、不本意な結果に終わりました。四月、心を新たに練習に励みましたが、新人部員はさっぱり、創部以来のピンチ、中学校訪問で本校受験を十数名薦めたわけですが、日大さんは勉強が厳しいからついて行けない、と、最終的には全員断られました。確かに、以前と比べて本校のレベルも向上し、また、日大全体の向上もあり、運動部に所属しておいても、学習を疎かにすると上に繋がります。誠に厳しい現実です。夏の大会も結果は、全国大会行き零ということで、なんとも申し分ない次第です。平成二年の夏の大会は県三位と期待以上の成績をあげてくれました。現在二年生六名(マネージャー一名)一年生九名の部員で頑張っております。部の高レベルを維持しながら、学習との両立を図り、進学等も考えるとき、私達の責任の大きさを改めて痛感すると共に、本校柔道部の為に、柔道部員のよりよき幸せのため、関係者、父兄、部員、OBの方の一致した協力体制を切にお願い申し上げます。



御挨拶

日本大学三島高等学校 柔道部OB会長 玉井 完一

本日ここに、日本大学三島高等学校柔道部の創部三十周年記念パーティーが盛大に開催されますことは、諸先生、諸先輩並びに関係諸氏の御指導、御協力賜と衷心より敬意を表し、感謝申し上げます。

日本大学三島高等学校が開校された翌年に我柔道部が創立されて早三十年、この間には、三〇〇名もの人間が、部員として共に稽古に励み、共に笑い、時には共に苦しんで参りました。

こうして今日を迎える事ができましたのも、ひとえに創部以来一貫して御指導を頂いております西島先生をはじめ、及川、土田、富田先生、諸先輩方の御指導のおかげであり、私達一同深く感謝している次第です。

想えば三十年前には、現在の合宿所あたりにありました白いペンキ塗りの木造建物、戦後の遺物のような、一年中大へん風通しのよい七十畳敷位の名ばかりの柔道場でした。その時の部員には柔道の経験者がいなく、帯の結び方、受身の指導から始めました西島先生の苦悩が見えるようです。

このようなスタートから三年目には早くも県スポーツ祭に於て、第二位の成績を挙げられる迄になりました。この三年目にしての成績が今日の栄ある当柔道部の第一歩であります。まさに血のにじむ稽古、稽古の連続の日々でした。以来、一生懸命努力をする、何事も最後迄やり遂げる不屈の精神が引き継がれております。その結果皆様既にご承知の通り全国大会出場も十数回を数え、常に上位の成績を残しており今では、県下で押しも押されもしない日本大学三島高等学校柔道部になりました。そのような高校生活三年間をやり遂げた卒業生が組織しているのがOB会であり、卒業生全員が加入しております。

勿論の事一期生の卒業間もない時期には、OB会組織があった訳ではなく、何事もそうであるように、最初に組織作りをして頂きました一期生の石原重則先輩の苦勞も大へんなものでした。当初は五、六名位からのスタートでした。その後二期生の石井宏明先輩と引き継がれました。それから一時期低迷期間がありましたがその時期に六期生の故、伊藤善雅君がOB会の灯を消してはいけなと立ち上がってくれました。そして現在は三期生の私がOB会長として今日に至っている訳ですが前にも述べましたように順風満帆ではありませんでした。やはりOB会にも二十七年の歩みがあります。

坊主頭から湯気をのぼらせ稽古をし、又西島、及川、土田、富田先生に叱られ、育てられた皆様も今では、それぞれの社会、職場、地域等で活躍されております。

お忙しい皆様方ですので、なかなかOB会の行事に参加もできないかも知れません。

会員も親子程の年齢差がありますが同じ畳の上で稽古をした者同志です。三十年を契機として積極的に行事に参加して、交流を深めて頂き会員皆様の益々の発展と、母校柔道部の発展を願うものであります。又OB会を代表し、西島、及川、土田、富田先生に重ねてお礼を述べると共に健康に留意され、当柔道部及びOB会の今後の御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

第一期生(昭和三十七年三月卒)

石原重則

夙 忠義

山本 徹

渡辺 博夫



「柔道部の思い出」 山本 徹

昭和三十四年、創立二年目の年入学、今度国体でならした柔道の達人が先生で来たんだと聞き付け仲間を募り柔道部を創設、昭和三十五年が柔道部誕生の年である。当時、道場は大学に居候、古びた畳みは今のようにつまみ食いのあるマットとはお違いである、練習のハードさは？寝技とくれば畳み表のい草と皮膚の摩擦試験である。

大学生練習台の我々は最後に大抵は落とされる、数分間の宇宙遊泳的な記憶喪失の経験はお陰様で、また明日もあるであろうこの瞬間を思い出さないと、恐ろしい麻痺のそれに似た快楽だったのかもしれない。

今の根性は青竹があつと言う間に傘の骨になってしまふ鬼のN先生と、大学生のおかげである。

近くの大手企業の柔道部との練習試合、選手の名前がいかげんだとおしかりを受ける。何と言っても信じられない名前ばかり、大学生で九州出身の、「宗」さんを始め、「荒」「北風」同級生では「夙」後輩の「傘」、これだけの名前が並ぶと信じてもらえない。創部した仲間は皆柔道は初めて、時差入部の連中は腰に黒帯の猛者はかり、まさに前門の虎、後門の狼ならぬ、前には欲求不満の大学生、後ろには黒帯の新生入生、そんな中でいまだに柔道部の先輩として扱ってもらえる？のも、運動部特有の節度ある気風の賜物であらう。

学校が新しく、未知の校風の中、頭は五分刈り、ずぼんの裾幅二十三センチと今思えば厳しい校則、毎朝のいちよう並木に学生服の行列のすがすがしさをいつまでも忘れないであらう。



「30星霜」 渡辺 博夫

一九八九年は、本家日本大学が創立一〇〇周年を迎え、一〇月四日の創立記念日を高輪プリンスホテルにて盛大に祝った。幸運にも私は、この記念式典に生徒の代表とともに出席することができた。そこには天皇皇后の御臨席があり、しばしの緊張と二十一世紀への期待があった。

時を同じくして、わが母校も昭和六十三年は創設三十周年を数えて、新しい校舎の建設・ブレザースタイルの制服・特進クラス設置と、次代への備えと三十年の足跡が評価された。うれしいことに、この足跡の中に私を育ててくれた柔道部の活躍の歴史があった。「よくぞ頑張ってくれたものだ」と後輩たちへの賞賛と、これも変わらぬ情熱をもってご指導くださいます西島先生のお陰と思い、また及川先生の両先生への感謝とその御苦労に対して敬意を表します。思い起こせば、わが青春は昭和三十四年に母校入学、そして翌年の柔道部創部の時にあったような気がする。現在も変わらず部活動の意義は大きく、その思い出は一生の宝であると思うのは、私だけではないであらう。

当時、学校は新設高校として、また大学の付属高校として、世間より大きな期待をうけ内にあつては気迫のこもった先生方の指導・生徒の頑張り、よき時代にめぐり合ったものと感謝の一念である。「精力善用」「自他共栄」のもと、母校そして柔道部の益々の発展を祈ります。

第二期生(昭和三十八年三月卒)

部員心得

一、日大三島高校柔道部の誇りをしつかり
胸に抱いて行動せよ

二、礼儀を重んじ部員相互の親和を計る事

三、素直な心で柔道に取組み常に真剣に
練習に励め

四、練習は己れのすべてを技に打ち込んでやる事

五、立技寝技は車の両輪の如し一方に偏するな

六、摂生に注意して練習を怠るな

七、打ち込みは万遍なく繰り返し其の技を
早く修得せよ

八、作りと掛の体得、引き手は思い切つて

九、寝技の入り方は敏捷に押え方はトックリと

一〇、技を掛けるチャンス 押えるチャンスは絶体
にのみかすな

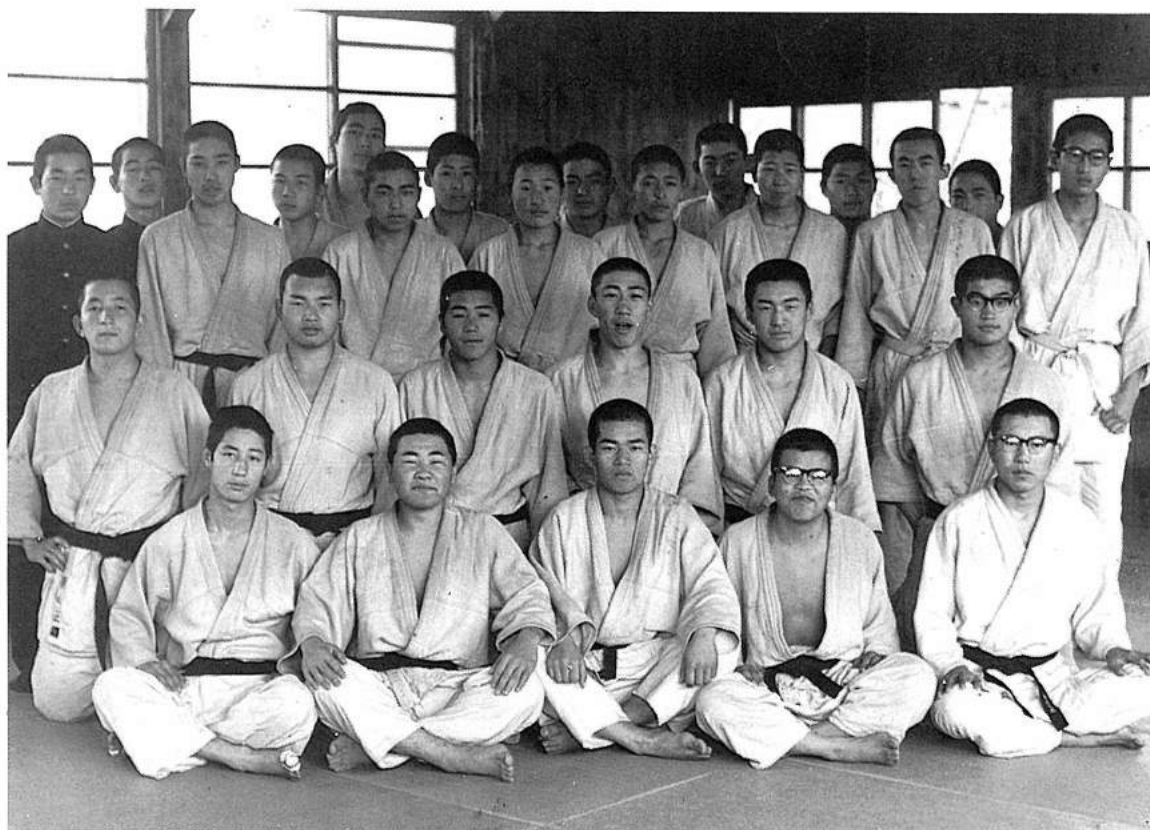
帯の締め方も、礼儀も、受け身も知らなかった我々に、手とり足とり柔道というものを通して、精神力をたたき込んで下さった西島先生に感謝いたしますと共に青春のエネルギーをそそいだ三十年前の思い出が走馬灯のように浮んできます。昇段試験の受け方もわからず、右往左往したり、試合会場では、「日大三島に柔道部があるの？」と軽視された時代……でも西島監督の「五年以内にインターハイに出場する！お前達はその石段になれ！」の合言葉で頑張った毎日でした。

夢のようなことと思っていたのが現実となって、当時の苦しかったことが今はなつかしい思い出となっています。



二期生オールキャスト

第三期生(昭和三十九年三月卒)



▲前列第三期生

左から(長田 久典)・(玉井 完一)・(山本 正宣)・(片瀬 俊直)・(横山 保)



▲左から(片瀬 俊直)・(横山 保)
(岡本 信明)・(玉井 完一)



▲(長田 久典) (玉井完一)



▲左から(片瀬 俊直)
(玉井 完一)
(第四期生 秋山 正)

思い起こせば、ずーと昔の事であり、つい昨日のようにも思う入学時、柔道部へは百名近い人が入部しました。勿論、中学生の時に、柔道の経験があった人も何名かはいました。狭い柔道場に入りきれない人数であった。

しかし、一日毎に一人へり、二人へり、夏の合宿の頃には一〇数名になってしまいました。入学後、柔道着を着た人間にとっては、一日も早く受身を身につけなければ、と言う思いで非常に辛い日々の連続でした。初めての合宿、私のように柔道の経験の無かった人間にとっては、思い出したいくない青春の一ページです。

しかし苦節三年、私共が三年生の時(勿論二年生の力が大きかったです)県スポーツ祭に於て準優勝をする事ができました。

我が柔道部の最初の賞状であり、その後に続く成績である。

遠い昔の思い出は、私にとっても、又、同期の人達にとっても一生の宝であろう。

今後益々の母校の発展と柔道部の発展を願う者の一人である。

第四期生

須賀正道



二年生の秋、柔道部へ出掛ける早朝、親父が「日米通信衛生の生中継のニュースが流れる」との事でテレビを見ました。冒頭に米国大統領の挨拶との事であったのに、画面に現われた第一報は「ケネディ大統領、暗殺ノ」であったのです。世の中の事はよく解からない年頃でしたが、大きなショックを受けたことを覚えております。

しかし、その日は我々柔道部にとっても黄金時代の始まりでもあったのです。

順調に準決勝まで勝ち進み、東海一との準決勝。中堅までは一人負けて進み、副将内海君の登場となった。敵は県下で名高い、深沢君を内股で見事、一本勝ち。応援する我々も嬉し涙を手で拭きながら、最後の大将まで三人勝ち抜いた内海君に声援を送った。こちらの大將は小林君。もしも大将まで回ってきたらどうしようと真青な顔して震えていたの思い出します。

決勝は二年連続インターハイ出場してきている静岡に対しては楽勝し、創部五年目で初優勝をしたのです。その後の毎月の昇段審査に参加しても日大が相手では勝てないという陰口も聞こえ、今までの劣等感が吹き飛んでしまったのです。

思い出の試合の一つに、三島市スポーツ祭がありました。当時、我々は学校での練習が終ると、隣りの東レの柔道場へ通いました。

東レには全日本出場している選手が二、三人いましたので、胸を借りに毎日通っていました。(しぶしぶ)内海君でさえ、立っている暇なく投げ飛ばされるのです。その東レのチームと決勝で当たったのです。レギュラーの人は少し抜けてはいたの必すが、普段投げられてばかりいた相手なので実力は、はつきりわかっていました。しかし、先鋒の美尾君が相手の跳ね腰を見事、透かして一本取ってしまったのです。東レは驚き、焦り、結果、優勝したのでした。

いよいよ三年生、最後のインターハイとなり、東部予戦も楽勝で決勝まで進み県大会出場の権利をつけ、沼商との決勝戦となったのです。一年生で今はじき伊藤君が裏を取られ、二年生の佐野雅美君が背負い投げでこれまた一本取られ、優勝を逃がしたのです。

柔道祭以来、初めての負け試合をしたのです。「鬼の監督」？の鉄拳が飛び、頭は全員五厘カット。県大会では再び沼商と対戦し、楽勝し、静岡にも勝ち、初優勝でインターハイ出場を決めたのです。個人戦でも重量級は勿論、内海君が優勝。

インターハイは伊勢市が会場となり、応援部隊は夜行列車に乗って駆けつけました。

初出場のため、選手も大会の雰囲気になれた様子で予戦リーグでは北海道の名寄農高には勝てましたが、神戸神港高にあっさり負けてしまい、決勝トーナメントには進めず、我々の三年の夏は終わりました。レギュラーになれずに三年間終った我々にも多くの思い出を残してくれたレギュラーの諸君に感謝するとともに、若くして他界された後輩の山下、伊藤両君のご冥福をお祈りします。

第五期生

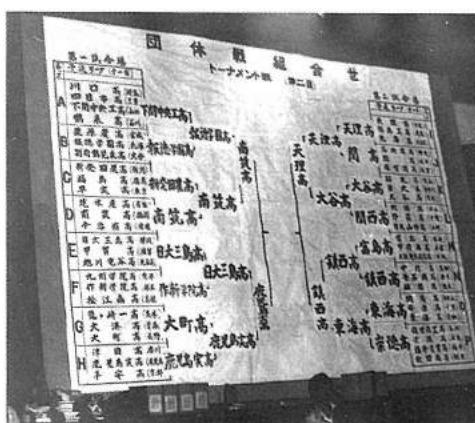
我々五期生は二十二名ですが主将の佐野君を中心に猛練習に耐えた仲間です。記念誌の発刊にあたり故山下君の御冥福を祈ります。(文責加藤)



5期生全員(道場前)



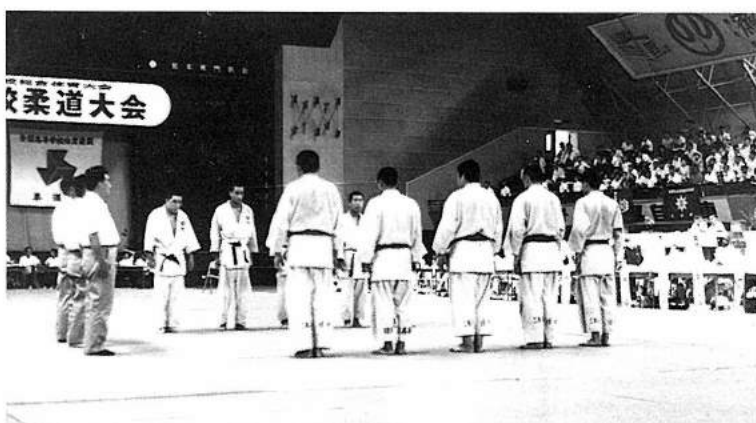
総体(入場行進)



高校総体(熊本県)



総体(試合前)



総体(試合前)

第六期生

日大三島高校柔道部の思い出

私達は、昭和三十九年四月第七期生（柔道部第六期生）として、日大三島高校へ入学しました。

当時は、東京オリンピックの開催にともない、期待の柔道の人気は大変なもので、柔道物の歌やテレビ番組が沢山あり、私達はかなり大きな影響をうけていました。

柔よく剛を制す、小より大を制すという言葉も、オランダのヘーシンクの優勝で、影のうすいものとなってしまいました。実際入学してみると、大型の選手ばかりで本当に、おどろいたものです。

入学時一二人の新人部員（六期）も卒業時には、十六人になっていました。

当時、西島先生、及川先生もお若く、常に道衣を着て、若さあふれ、気迫あふれる指導をしておられました。入学した年から卒業までの三年間は、連続してインターハイ出場をはたし、三年生の時には伊藤善雅を中心とした静岡県チームが大分国体で優勝するという、まさに破行の勢いでした。

三年生の時のインターハイは青森県で行なわれ、おしくも二回戦で北海道に負けてしまいました。

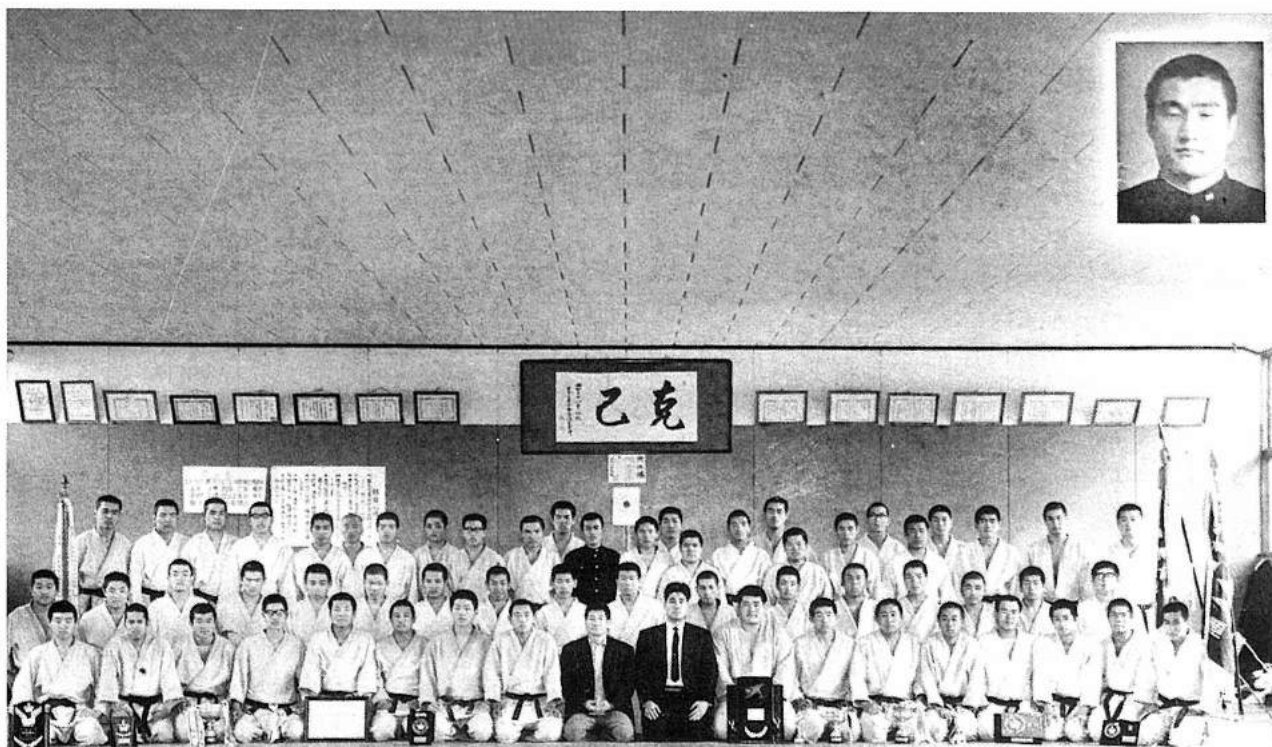
伊藤善雅を中心に、全員一丸となり、悔いのない充実した青春時代を送れました。

しかし誠に残念ながら、その伊藤善雅も四年前に病いにたおれ、故人となってしまいました。

春、夏の合宿所での合宿生活や、遠征による対外試合がいつも気力十分で行なわれていました。

この日大三島高校柔道部で経験した、すばらしい学生生活は、その後も私達の大きな励みとなり、今の人生に大変な力となっています。

これも両先生、諸先輩方、後輩諸君のおかげです。今後も増々、日大三島高校柔道部が発展されますよう心から応援してゆきたいと思います。



● 下列右から

高橋（峰松）
田代（滝口）

甲賀

久保田

早川

山本

余田

伊藤

西島先生

及川先生

杉山

木口

山田

中老

山田

薩川

佐藤

中村

上梓

中村

守

● 上列左端

岩城

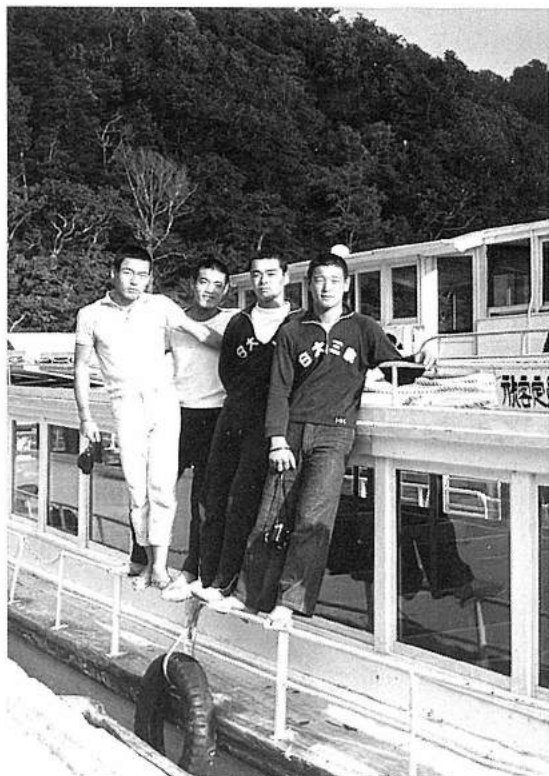
第七期生

第七期生の部員は二十二名

部長 伊勢谷 広己
副部長 望月 正義
マネージャー 加藤 一郎

「練習で泣いて試合で笑え」という先生の教えが、インターハイ予選で生かせず残念でなりません。悔しさのあまり流れてた涙は、忘れられません。

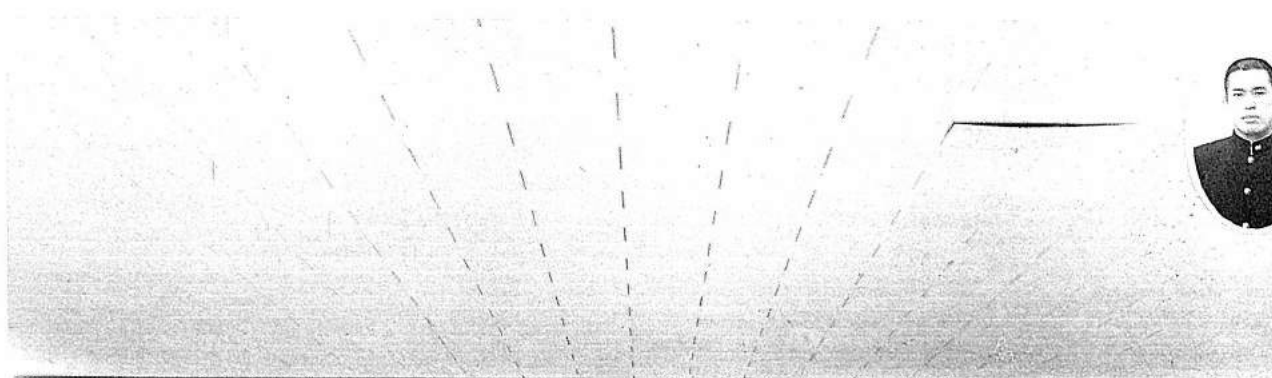
青森・石川・愛知等へと遠征試合の機会も数多く行なわれ、苦しい中にも楽しい思い出が数多くあります。



7期の仲間



先輩方と



柔道部

第八期生



我々八期生は、入学当時、入部者が八十名位おりましたが、一人減り二人減り、三年卒業時には十二名の部員が残っただけで、たしかし三年間部員としてやってきたおかげで現在諸先輩や後輩とのつながりもあり、ほんとうに良かったと思います。

一年生の思い出は、初めての合宿です。合宿所は他のクラブが使っていた為、柔道場で寝ました。夏なので虫よけに「バルサン」をたき、くさくて、三十分位外で、夕すずみをしながら先輩達と色々な話をし、昼間のきつい練習も一時わすれさせてくれ楽しい一時をすごしました。

それから、先輩の母さんが、トンジルを作ってくれて、何杯もおかわりをしたものでした。又OBや大学の本部よりきた、先輩に練習をつけてもらいましたが、昼休みに「今日は、どいつをかわいがってやろうかな」などと話をしていると、こわくて体がふるえてとまりませんでした。三年の楽しいはずの、修学旅行は、インターハイの県予選と重なり、学校で順番でしたが、残念ながら、インターハイ出場はならず、選手はみな丸ぼうずの五厘がりとなり、くやし涙をながしました。

又楽しい事もありました。西島先生が結婚をなされ、奥様の実家にて、すきやきパーティーをやり、酒もちょっぴり飲ませてくれました。三年間、県では、これと言った成績も残せませんでした。先輩達がきずいた、名門日大三島の柔道部に三年間、せきをおき、つらいきびしい練習にたえた事は、胸をはっていいと思います。

では、ここで八期生の面々を紹介します。小林達 我々のメンバーのリーダーで有、キャプテン、立ち技の切れは、するどく、内股、かえし技を得意とし、奥えりをもつたら一パツ勝負

関公信 同期の中では足が一番長く、内股

を得意としていた。近眼の為厚いメガネをし、一見インテリ

山口誠一 技の切れは天下一品、背おい投げ、寝技がうまく、ポイントゲッター、ガッツが有り、絶対へこたれないガンバリヤ

浅野一郎 同期では一番体重が有り、大外刈りが得意、自動車が好きで体にながれず、ホンダの軽自動車乗りまわしていた

山本文義 入学当時、相撲部に入っていたが、途中、柔道部に入部、現在はないが、運動部の寮に入っていた。けがが多く、チューブでテーピングをし、練習をしていた

吉田洋 色が黒く馬力が有るので、ニツクネームは馬、どんどんと前に進み大外刈がりを武器としていた。性格は、やさしく、おひとよし

斉藤正由 我々のまとめ役のマネージャー練習でけがをししたり、試合で遠征に行ったりなどせわをしてくれ一番大変な役をしてくれた

永井敏幸 まじめな性格でおとなしい得意技は払い腰・バック投げ、相撲部にて時期に籍しインターハイ出場、県でも二位の成績を残す

望月章生 名前を、あきおと言うが、しょうせいと呼ばれ、おとなしく、ガッツをうちひめている、得意技は、払い腰

鈴木正己 身体は小さいが、中学時代より柔道をやっており、背おい投げを得意としており、めんどうみが良く、サブマネージャー的そんざい

池田康一 軽量級の試合前、体重がオーバーしており、ランニングで体重をおとし、黙々と練習をしていた。得意技はたいおとし

杉山幸二 練習で耳をつぶしたりしたが、練習体まずガッツマン、得意技は背おい投以上十二名ですが、もう一人、内山君が、在学中に、オートバイ事故で、なくなり残念です。ですから十三名で頑張りました。

第九期生

「我が柔道九期生」

伊藤 国雄

私達は、昭和四十二年本校と同時に柔道部に入学しました。当時入学した人員は三十五名でした。小さな体の者や大きな者などがあり一生懸命練習をしました。初めての夏の合宿が終った時点で一諸に入部した者のうち三分の二が退部していました。しかし残った者は歯をくいしばりながら先輩達の指導をうけ一生懸命頑張りました。高校三年間を通して、団体



戦では、あまり良い成績を残すことが出来ませんでした。個人戦では何人かの者が東部で優勝、準優勝の成績を残すことができました。今、社会人になって、先輩方のご指導が色々と役に立っております。それは、私だけでなく同期の者も同じ事だと思っています。私は先輩達の教えを後輩に伝え、今もお柔道の道を進んでいます。私達九期生の中にも私と同じように、現在も柔道を続けている者が何人もおります。最後に、若い人達が柔道を愛し、精心を鍛えりっぱな人間になる手助けが我々九期生にできれば幸いです。



第十期生

菊地勝彦



柔道部三十周年を心よりお喜び申し上げます。

日大三島高校柔道部を創り、育ててくれた及川先生・西島先生のこの三十年の道程は大変なことであつたろうと思います。大会で華やかな成績が残せている、『名門』という環境の中には必ず情熱を燃やして育ててくれる指導者がいる——真にその通りだと思えます。

及川先生、西島先生、諸先輩方、十五名の同期生と共に練習した、あの『柔道場』が私に様々なことを教えてくれました。試合というものは、ただの結果にすぎません。結果は確かに大切ですが、より大切なのはそこまでの過程、すなわち努力です。柔道は相手との戦いである、と同時に自分自身との戦いでもあると思います。それを教えてくれたのが、あの『柔道場』です。卒業して十九年が過ぎ、私にも二十年間もの後輩達ができ、今もあの頃と同じように、あの『柔道場』で練習に励んでいるのかと思うと感慨一入です。

私達十期生は「柔十会」（柔道部十期の意）なる同期会を作り、年一回全員が集まるのですが、その時の話題は決まって練習の苦しかったこと、また楽しかったことと『柔道』のことばかりです。

「練習に明け暮れた毎日 夏の合宿で先輩方の胸を借りたこと」

柔道部に在籍した高校三年間は本当に充実した日々を過ごせたと思います。

良き師、良き先輩、良き友から得た多くのものから、今の自分が成っているのではないかと思います。

伝統ある日大三島高校柔道部が三十周年を契機とし、今後更に大きく躍進されますことを祈念すると共に、先生方には変わらぬ情熱を持ち続け、これからも私達の目標として、師としてご活躍いただきたいと思います。



《十期 団体戦メンバー》

・先鋒 室伏・次鋒 坂倉
・中堅 菊地・副将 増田
・大将 山本

＊東部及び県の大大会制覇

＊東海大会では十五連覇の東海高校（愛知県）を破り初優勝

＊インターハイ出場 準々決勝で栃波工業高校（富山県）に破れる



我々十一期生は十名です。思い出すことといえ、日々の稽古の厳しさと、毎日の合宿でのつらさ。合宿の最終日には、仲間と風呂場で万才サンショウをするほどでした。また、東レの道場での練習では、行く道ノリがうれしいことを思い出します。

しかし、苦しかった思い出以上、今に思い出せば、楽しいことも数々ありました。記念誌に掲載する写真をさがしましたが当時の写真がいがいと残っていないのにおどろきました。



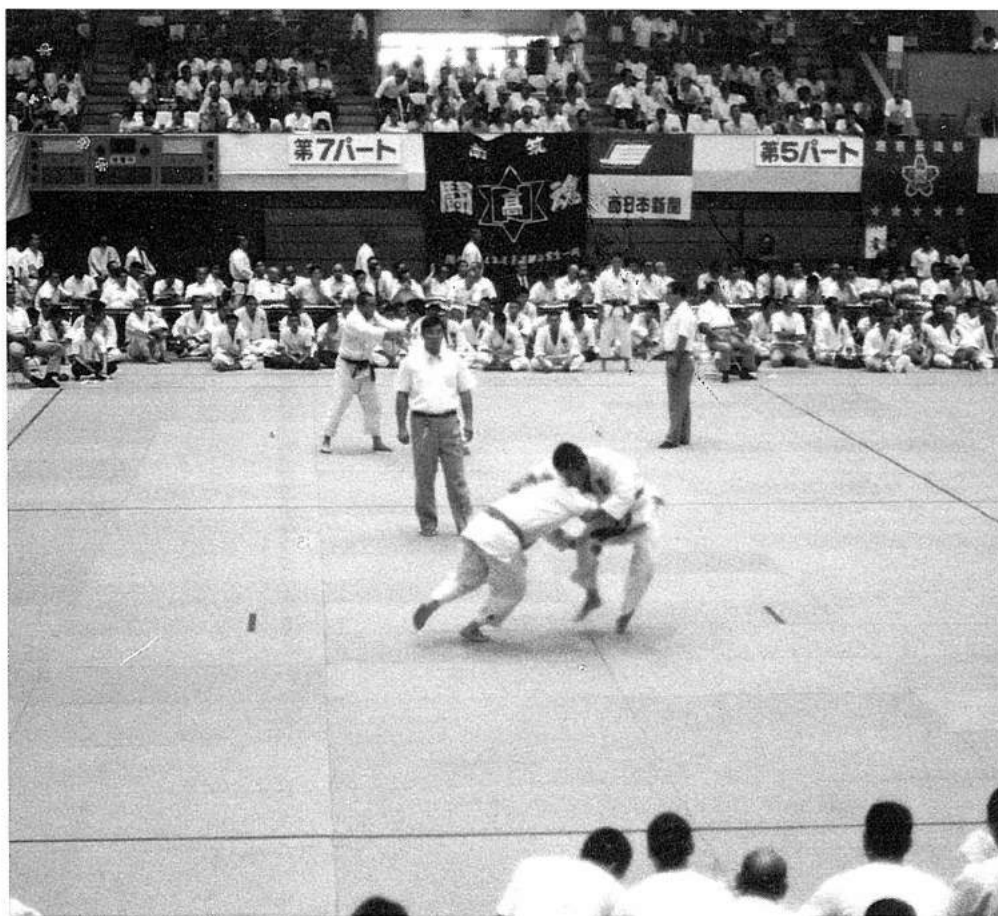
▶右端から順に

山口昭夫・岡 直樹・末長信太郎・後藤英実・勝呂博之
水上雄士・及川直躬先生・西島外美雄先生・殿岡崇廉
栗田幾雄・堤 利夫・高田泰幸

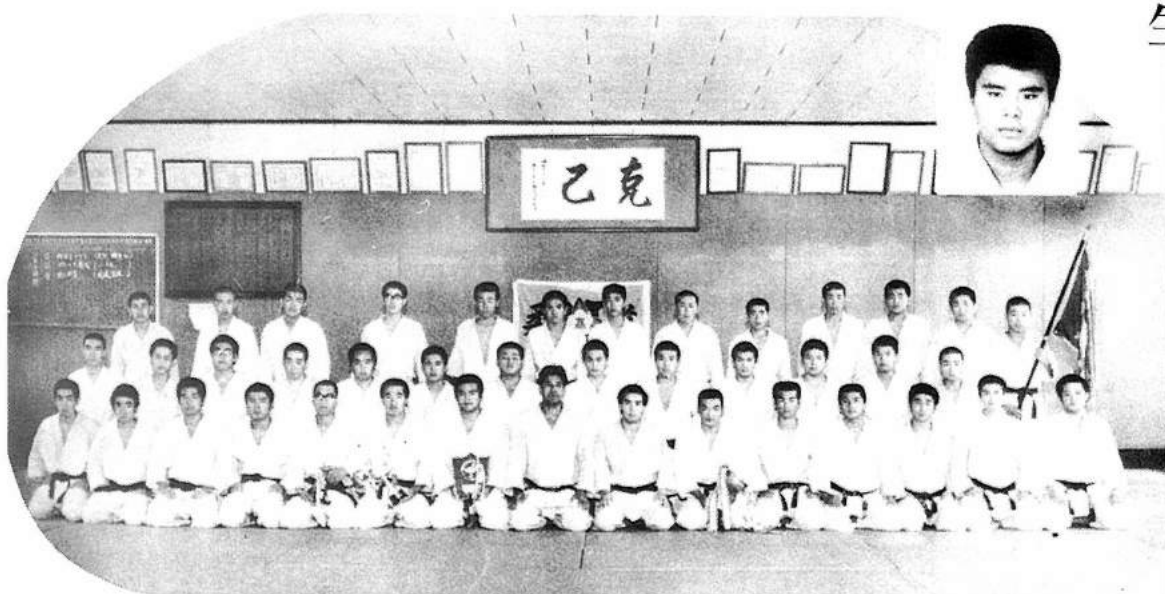
第十二期生

日大三島高校柔道部三十周年心よりお喜び申し上げます。また、今日まで、我柔道部に御指導を頂いた西島・及川両先生始め諸先生方に心より感謝いたします。

伝統ある日大三島高校柔道部のますますの飛躍と皆様の御健勝をお祈り申し上げます。



第十三期生



我々十三期生は、芹沢秀吉主将を中心にインターハイ出場を目指し、道場で汗を流し、練習しましたが県大会ベスト四で終り三年間の柔道部活動を終わりました。しかし体重別では、重量級、芹沢秀吉君中量級高梨重範君が出場し全国で頑張りました。高校入学時、何か運動クラブをと思い柔道部へ入りました。初めて柔道衣を着、練習にもついて行くのが精一杯で、寝技では、何回か落され夢心地な気分にならせていただきました。

竜沢寺の階段登り、東レでの練習、当時は練習がいやでいやで何回かやめようと思って練習を休み、いかに楽しようと考えていました。しかし、今になって思えば、もっと練習し、もっと強くなりたかった。と後悔しています。

三 須 真 博

第十四期生

柔道部創立三十周年おめでとうございます。並びに及川先生、教師生活無事全うされた事を心からお喜び申し上げます。思い出せば我が期は西島先生初めコーチの方々大変迷惑をかけた期でありました。先輩方の作った素晴らしい伝統をもの見事に打ちくだいてしまったのです。しかし我々四名は後輩達の踏み台となり頑張りました。我々が卒業後、十六期生が静岡県優勝、インターハイベスト八に入賞した事を風のたよりで嬉しく思った事が思い出されます。現在四名ともバラバラになってしまいましたが、三十周年を機に是非再会したと思います。

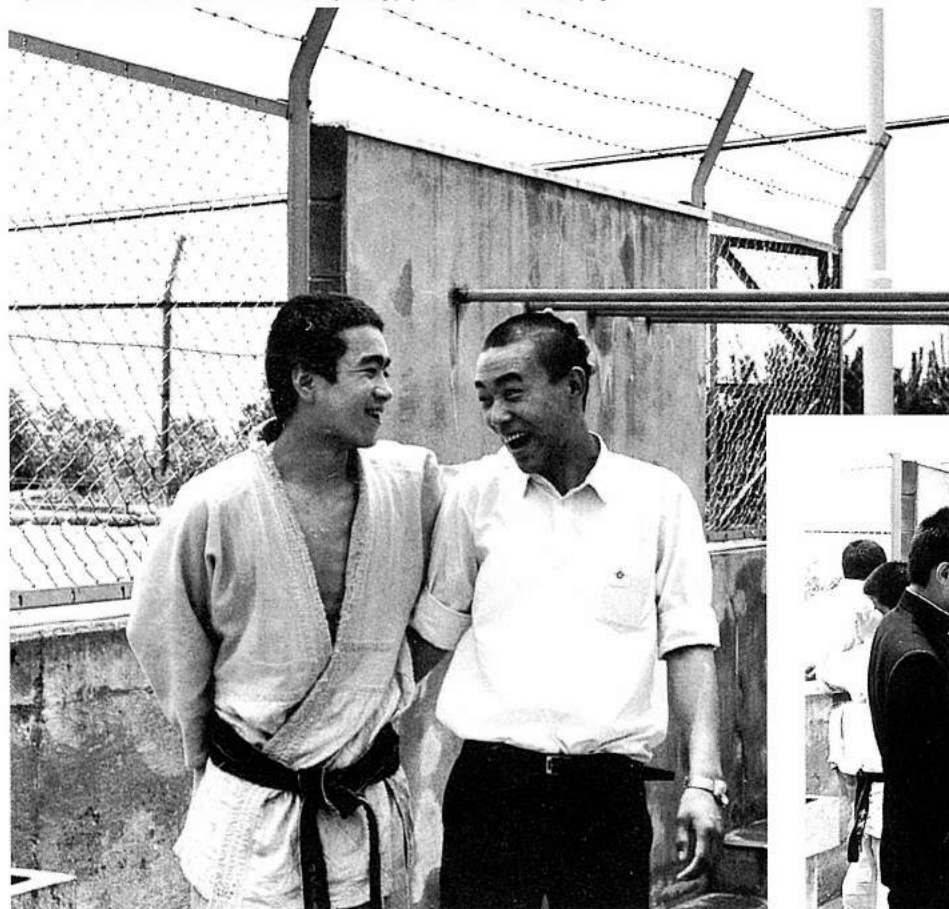
東部体重別個人戦 沼津東高でのスナップより。

後列右端 主将 大内恵理。後列右より3人目 副将 矢後忠。

後列右より4人目 副将 毛利裕司。後列左より2人目 マネージャー 小林伸一。



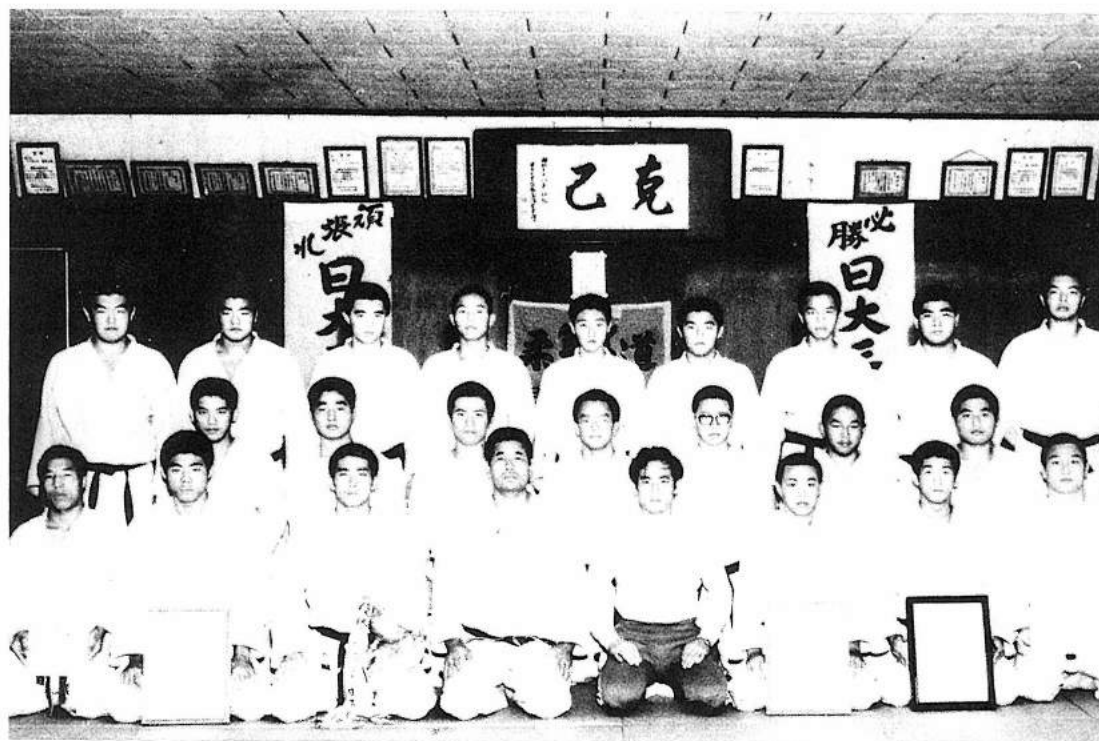
当時は実の兄弟の様でした。後輩の野田とのツーショット。



大内・毛利・小林 3人のスナップカメラをみているのが湯ヶ原出身の『タコ』寝技のうまい毛利さんでした。

第十五期生

北村 聖



柔道部創立三十周年おめでとうございます。我々十五期生は三十年の歴史の中で一番部員数の少ない期でありました。しかし新人生の時は十五名の部員がいたのですが二期前半その殆んどがやめてしまいました。一級上の先輩の計画的な脱走事件があった為です。あの時の西島先生は顔には出さないものの心中はかなりのショックであったと思います。残ったのはカスばかりで大した成績も残せませんでした。先輩後輩に助けられ、人生の中でも最高の思い出とする事が出来ました。

卒業アルバムの写真前列
左より3人目
主将 北村 聖。
前列右より2人目
副将 内藤真琴。
前列右より3人目
マネージャー 野田義道。



最後に及川先生、長い間ほんとうに御苦労様でした。これからも日大三島高校柔道部を見守って頂きます様お願い致します。

試合後おにぎりを片手に自己反省する北村選手。



第十六期生

片 淵 弘 佳



日本大学三島高等学校柔道部三十周年おめでとうございます。十六期生一同、心より喜び申し上げます。また、今日までの西島先生をはじめ諸先生方の柔道部に対する、ご熱意ご努力に対して心より敬意を表します。我々十六期生はちょうど我が柔道部が創部した頃に生まれましたので、三十年の歴史を実感できます。その自分自身の人生を振り返りますと日大三島の柔道部で過ごした三年間は心身ともに充実して、その間の経験がその後の自分の人生に大きな自信を与えてくれた、一番長くて、辛くて、そして楽しい三年間だったと思います。私を含めたそれぞれの学生達には三年間ですが、西島先生が創部以来、現在に至るまで三十年以上、我が柔道部を熱い指導で引っ張って来ていただいたご功績に対し、あらためて深く感謝すると共に先生を陰で支えられてきた奥様に心よりお礼申し上げます。

さて、私が柔道部に入部したときは十四、十五期の先輩は全部で七名しかいませんでした。その諸先輩方が私達が入学当初から私達のインターハイ出場と名門復活を夢見て稽古台になってくれました。また、同期生は十名ですが、米山主将を中心によくまとまっていたと思います。休日もいつも一緒に遊んでいました。下級生もよくついて来てくれました。どんな試合の時でも自分一人ではなくみんなの支えて、自分が試合をしているのだといういつも思っていました。私達は入学以来、目的をインターハイ出場一本に絞っていましたし、絶対出場できると信じていました。しかし、予選を前に県優勝は一度ありませんでした。それでもインターハイだけは絶対に勝てると思っていた。そして、結果的に静岡県ベスト4がそのまま順位だけ入れ代わり、東海四県のベスト4になった激戦でハイレベルのインターハイ予選をみんなの和と意地で勝ち抜く事ができ全国でもベスト8の成績を残す事ができました。卒業の時、西島先生のお宅へ伺った帰りに、玄関を出た私達十人に先生が泣きながら「わしを置いていかなくてくれ。」と叫ばれたのが今でも耳に残っています。その時は皆照れ隠しに笑っていましたが、涙をこらえていたのをよく覚えています。たまに同期生が会うと高校時代の話（西島先生の〇〇話）をしては時間を忘れて酒を飲みます。これ以上のつまみはありません。

大変悲しいことに、昨年同期の高村武司君が病に倒れ急逝しました、心よりご冥福をお祈り申し上げます。最後に今後の日本大学三島高等学校柔道部のますますの発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。



第十七期生

黒田 英樹

私達十七期は入学当初より充分期待されていたようですが、結局、柔道祭、新人戦、スポーツ祭、総体県予選、オール日大等すべての大会において一度も優勝する事ができず、今にして思えばポイントのずれた噛合わない歯車のまま丸三年を過ごしてきてしまったように思われます。

もちろん個々の努力が足りなかった事もありますが、心体の調節のできない稽古量と練習内容に常に圧迫を感じ「道場に向かうのがいやだ」「早く引退したい」という意識だけが先行し、最後までムード作りのできないまま競技生活を終えてしまった感じがあります。

試合に勝つ為にどの学校にも負けない練習量で体力の限界まで自分を追い込む事も必要ですが、それには適度の休息と普段からのびのびと自由に練習できる雰囲気があれば自らをそのような気持ちにもっていくのは難しいのではないかと思います。何事も自覚を見出す事が大切ですがもっと憂うつ感のない楽しい雰囲気であれば試合も練習も溢れる闘志で力一杯できたように思います。当時を振り返り、感じたままを述べましたが、これから高校柔道はマイナスイメージを少しでも減らして喜びを全身で表現できるような華やかな要素を取り入れていく事が望ましいと思います。今回の三十周年を祝すと共に柔道部の益々の発展をお祈り致します。



第十八期生

森 精一郎

私にとって、柔道とはなにか？と聞かれればやはり青春と答えるでしょう。私の入学当時の日大三島柔道部は、第二次黄金時代と言われ、他をよせつけぬ強さを誇っていました。

そんな時私たち十八期生は、前年までは、特待生を集めていたのに対し、一般からのみ生徒を募集し、ほとんどが、柔道を知らない初心者、加えて、二年生三年生の平均体重が八十五キロ〜九〇キロにくらべ、およそ柔道とはむすびつかない小柄なもののばかり集まりました。

当然のことながら、受身も満足に出来ない私たちにとって、乱取りや、寝技などの専門的な練習はむろん、柔道部そのものについて行くことすら精一杯でした。

特に、いんしょうぶかいのは、入学した年の、富士宮での夏の合宿でした。自宅をはなれての初めてのきびしい強化訓練、先生の口から次から次へとび出す練習メニュー、ともかく最後の方は、汗か涙かわからないくらい顔をくし、や、くし、や、にして腕立てふせを、やったことを今でも鮮明におぼえています。合宿の一日一日、いやそのしゅんかんしゅんかんが自分とのギリギリのたたかいてした。

でも、合宿を終り、やりとげたときには、身も心も一まわり大きくなった様な自分を感じたものでした。

そして夏がすぎて、秋が来るころには、勉強と両立出来ないから、体調が悪いから、けいこについて行けないから、などの理由で、何人かが退部してゆきました。結局三年の卒業まで、残ったのは、私を含め六人しかいませんでした。

はつきり言って私たち十八期生は、日大三島柔道部に黄金時代が有るならば、その逆のどん底の時代といってよいでしょう。しかし私は、こう思います。試合の結果はどうあれ、私たち六人は、日大三島柔道部の一員として、三年間やりぬいたことは事実だと、そして伝統有る道場に自分の名ふだをのこしたことを、今でも自分の最大の誇りだと思っています。子供が出来た今、自信をもって、彼等に言えることは、高校時代青春をかけ「日大三島柔道部の一員として生きた」こと、このことにまさはることは自分自身ないと信じてうたがいません。

以上、はなはだ乱筆乱文では有りますが、私の柔道部時代の思い出をつづってみました。最後にお世話になった西島先生を初めとする諸先生方、くわえて諸先輩方に感謝の意を表わすとともに、日大三島柔道部の、ますますの発展を祈り、結びたいと思います。



第十九期生

日大三島高校

柔道部十九期生

片 瀨 典 利
増 山 勤 学
片 山 浩 学
渡 辺 浩 学

昭和五十二年〇月△日

坊主頭の疲れはてた四人組が三島駅に向かって歩いていく。どうやら日大三島柔道部の一年生のようだ。

N・K「オレ明日の朝、絶対電車に乘らねエーからよ！」

T・M「オレもそうしようかなー。」

M・K「いいね、いいね、休みだと思いましたが、つてとぼけちゃうか？」

H・W「...」

翌日：日大三島柔道場にて...

H・W「今日もここへ来ちゃった。」
他の三名「明日こそは、」と思いつつ

T・M「...」

N・K「...」

M・K「悪い夢ならさめてくれ!!」

昭和五十三年〇月△日

そうこうしている間に一年がすぎ四人も二年生になっていた。楽しそうに笑いながら前を歩く高校生の男女を見つめ、

M・K「世の中には、ああいふ高校生もいるんだな。」

H・W「それは向こうのセリフだよ。」

N・K「オレたち何か間違ってるか？」

T・M「よくわかんないけど...」

昭和五十四年六月

静岡草薙体育館

四人は

N・K「...」

T・M「...」

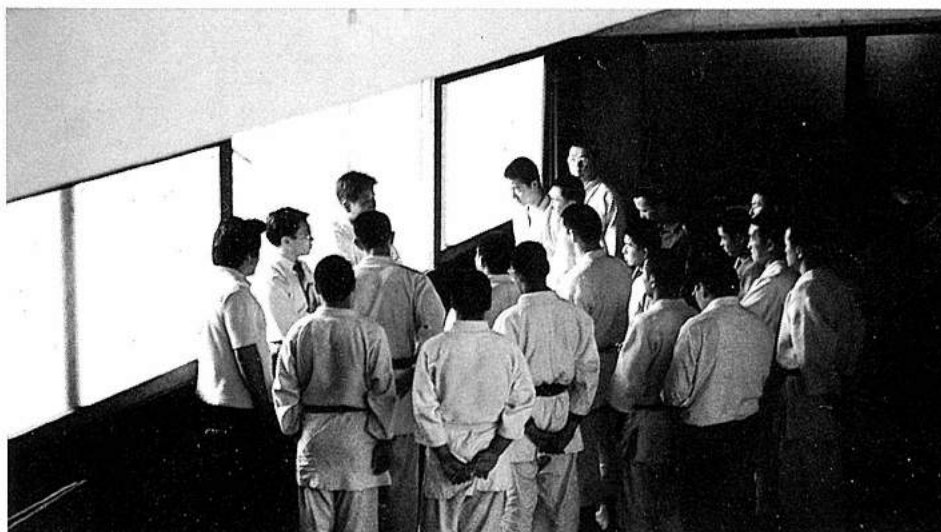
M・K「...」

H・W「...」

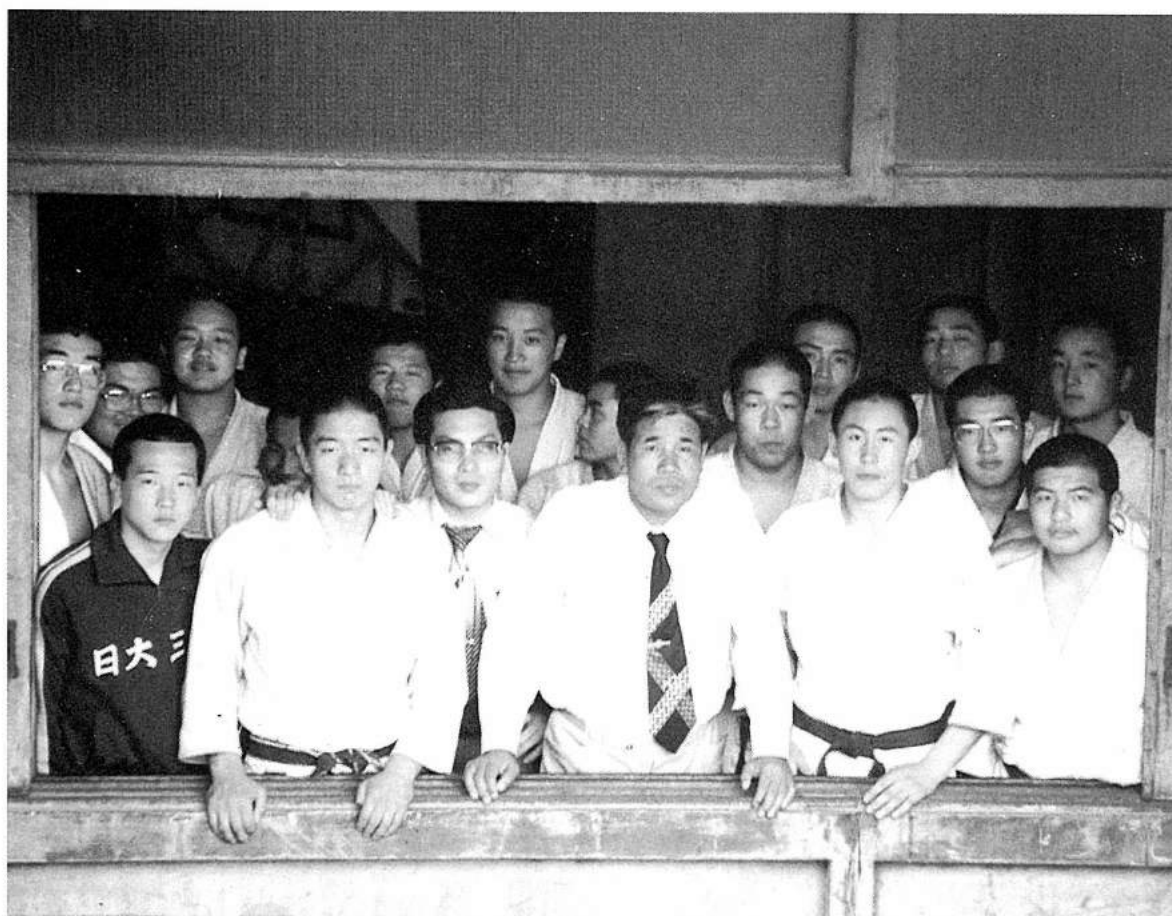
「勝者に勝る敗者」の涙を流していました。N・K

西島先生、及川先生、土田先生はんとうにありがとうございました。これからお元気で御活躍下さい。

今回このアルバム編集委員の皆様、御苦勞様でした。



第二十期生



森川 義一
堀内 次平
杉山 修

日本大学三島高等学校柔道部創部30周年を迎え、謹んでお喜び申し上げます。

月日の経つのは早いもので、卒業してもう10年になりますが、この記念アルバルの件で連絡をいただき、久しぶりに学生時代のことをいろいろ思い出しました。特に高校時代の思い出は、イコール柔道部の思い出と言っても過言ではないと言えます。私共20期は部員が少なく、練習するにも全員が参加しても道場がまだ余り、先生の目がすべてに行き届き、手を抜くこともできなかった（それでも抜いていたかも）というかんじでした。特に夏の合宿においては、ほんの数日の期間ではありましたが、午前、午後のきびしい練習に加えて、うだるような暑さで、意識はもうろうとして自分がなにをしているのか、わけがわからなくなってしまうこともあり、食事もほとんどのどを通らないような有り様で、部員同士であと何回食事をしたらこの合宿が終わるかなど真顔で話をしたのも、今では良い思い出として心に残っています。

近年、新聞、テレビ等で柔道部の活躍ぶりを拝見するたびに、とても喜ばしく、またOBとして誇らしく思います。最後に柔道部のますますの御発展を期待いたしております。

第二十一期生

青山源求

今、高校生活を思い浮かべると、毎日が柔道の生活だったことが思い浮かびます。当時は練習がきつく、よくやめたくなったことが有りましたが、入部した時に西島先生に「おまえはどうせすぐにやめるだろう」と言われたことがあり、この言葉が三年間私をやめさせずにがんばらせたものでした。西島先生にはよくならぬが、かわいがってもらったおぼえがありますが今になって見れば良い思い出になっています。私に根性という言葉をおぼえてくれたのもこの時期でした。柔道をやっていた一番良かったことは同じ年に入った九人の友人ができたことでした。同じ練習して苦労したことでも今でも良き友人です。柔道は今でもテレビでよく見ますが、見ると昔を思い出し興奮したり、柔道をやりたいようになることがあります。これから日大柔道部がより強く長く続くことを祈っています。



第二十二期生

日本大学三島高等学校柔道部創部三十周年おめでとうございます。22期生一同心より、お喜び申し上げます。高校時代に西島先生より御指導を受けた三島の道場での様々な事が、今では良い思い出となり、人生の励みになっています。

今後の日本大学三島高等学校柔道部のますますの発展をお祈りします。



第二十三期生

——日大三島柔道部OB 高村 広志

柔道部30周年おめでとうございます。我が23期生も数多くの思い出があり、特に真冬の埼玉・真夏の北陸そして中京地区と辛かった遠征が印象的ですが、今となっては、よい思い出であり、さらに各自その後の人生において最高の自信となりました。



第二十四期生

高橋 司

柔道部創立三十周年おめでとうございます。創部三十周年を迎え私もその一員であることを誇りに思います。現役時代数々の大会、練習、いろいろありましたが、今ではいい思い出です。柔道部のますますの発展をお祈りします。

笈川 健也

柔道部三十周年、おめでとうございます。今想えば、様々な懐かしい場面が目に見えかびます。インターハイ、春の選手権等、夫々に力を出し切って頑張った。あの頃に戻りたい心境です。

堀池 清彦

つらい練習、合宿、遠征などありましたが春夏連続ベスト八という時に柔道をやる事ができ、又三十周年を迎え柔道部にいた事を誇りに思います。

青野 裕

高校生活の三年間は柔道、柔道また柔道の毎日だったような気がします。今思い起こすと自分の人生にとって大切な経験をしたと思います。「いい思い出」ありがとうございます。

山口 謙太郎

現在、厚木ナイロン商事株式会社国分寺支店にて営業を担当。

平成三年四月からは、実家に戻り、父親の経営する会社に入社予定。

今の会社で培った経験を四月から活かして頑張ります。

滝川 信忠

現在、富士ソフトウェアに勤務しています。仕事内容は松下電機の英国・米国向けの移動機、自動電話のソフトの開発を行っています。



第二十五期生

熱き思い

小井出 佳夫

月日の過ぎるのは、早いもので高校を卒業して五年余りが過ぎようとしています。社会人になって約一年、思い起こせば、柔道部での、はげしい練習も、今は思い出に、変わりつつあります。規則正しい生活、礼を重じた練習、試合、今実社会に出て、高校での三年間、日大柔道部員として、すごした日々が大いに役立っています。少々苦難は、乗り越えられそうです。しかし考えてみれば、学業は、もちろんだが、柔道に明け、柔道に暮れた三年間だったと思う。苦しい練習、床にしたり落ちる汗。そして試合の時の心臓の音、今にも張りさけんばかりだったような気がする。あの時の何にも勝る緊張感。今思っても身体が、ふるえます。こういう思いはやはり柔道に熱中した三年間の高校生活があったからこそと思う。今は柔道を離れているけれど、あの頃の熱き思いは、友達顔と共に、忘れる事はない！これから先の人生に置いて、柔道部員だった事を、誇りにしたい。そして何事にもチャレンジしていきたい。



第二十六期生

「高校時代の思い出」

大澤 力

私の高校時代といったら本当に柔道一色だった様な気がします。そして、その思い出といえど楽しかった思い出よりも、苦しかった辛かったという思い出の方が多かった様な気がします。なぜなら、私が入学した年と翌年日大三島柔道部は、静岡県はおろか東海四県でも負け知らず、そして、全国大会に出場しても大活躍。そんな時代に入學した私は毎日必死で練習しました。寝技をやれば軽く押さえられ、締めおとされる。立技をやれば組んでは投げられ、それでも立ち上がって食い下がる。その繰り返しです。一日に五十本以上は投げられていたのだろうか？ 思い出の中の苦しかった部分というのは毎日この練習の繰り返しをしていった高校一、二年の二年間の事です。辛かった部分というのは、私達が最上級生になり、この伝統を守っていかなければならない立場になった時である。私達の学年は、特に強い選手もおらず、皆、どんぐりの背比べであり、正に不作の年であったといえよう。いくら練習しても、試合では勝てず、先輩達が勝ち取った、優勝旗、トロフィー等を試合に出場する度に返還するばかり、何ひとつ守る事はできなかった。私達も辛かったが、こんな弱い私達でも見捨てずに、熱意と愛情を持って指導してくれた西島先生は私達よりも何倍も辛かったと思います。合宿のミーティングの時、西島先生は、必ず決まってくる言われました。「最悪の状態を上手に切り抜いて最高の状態にしてこそ本当の男である。」この言葉は今でも私の心の中に強く残っており、そして、私の教訓になっています。今、こうして現在の自分があるのも、日大三島柔道部に入学して三年間頑張り通したからであると常々思います。卒業後現在も御指導して下さっておる西島先生と私達二十六期生を支えて下さっております日大三島柔道部OB会の先輩方に心から感謝しております。今後も宜しく御願い致します。私も、これからも日大三島柔道部二十六期卒業生であるという事を常に忘れず、誇りとし、精進していきたいと思っております。



第二十七期生

曾根原 英雄

日本大学三島高等学校柔道部が創部三十周年を迎えることを大変嬉しく思います。

自分がこの柔道部に入部したのは昭和五十九年の四月、ちょうど三月の全国高校選抜大会で三位という輝かしい実績を作ったばかりの強豪チームでした。中学のころ柔道部でなかった自分は三年間続けていくことができたか不安な気持ちでいっぱいでした。そんな未熟者の自分を三年間厳しく、そして時にはやさしくご指導してくださったのが西島先生でした。先生には柔道の技術面はさることながら、人生について、社会について、これから生きて行く上で大切なことなど多くのことを教わりました。そして今になって先生の言われたことが少しずつわかってきたような気がします。

自分は現在、日本大学の本部柔道部に所属していますが、西島先生の教えを心の支えとしてこれからも頑張っていこうと思います。

自分がこの柔道部を卒業してまだ三年しかたっておらずあまりOBという実感がありませんが、我が日本大学三島高等学校柔道部のより一層の発展と活躍を心より願っています。



第二十八期生

菊地 傑

日本大学三島高等学校柔道部が創部三十周年を迎えることを大変嬉しく思います。
私が日大三島高の柔道部に入学したのは、昭和61年でした。私は中学時代は、実績はぜんぜんありませんでした。ところが高校に入り西島先生の熱心なご指導により、三年の時には、県内の個人タイトルをすべてとることができました。本心にわがままで自分勝手な私だったのに、見捨てることなく最後まで指導してくださって本当にありがたかったです。今になって先生の苦勞がわかってきた気がします。

私は今、本部の柔道部に所属しております。一年の時は、ジュニアで全国三位という成績をのこしたのに、二年になって、ケガとの戦いで、今ひとつのびなやんでいます。こういうとき、いつも三島の道場を思い出しよう一度、西島先生の指導をきき、一から出なそうと思ったことが何回もあります。ケガが完治したら、レギュラーになれるようにがんばります。

最後に、より一層の発展と活躍を心から願っています。

菊地が初の県一

返し技で森田に逆転勝ち



返し技で逆転、優勝を決めた菊地（日大三島・右）
二静岡市中央体育館で

有力校が順当勝ち

東海大工、湖南をかわす

県立三島	対	東海大工	勝
県立三島	対	湖南	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝
県立三島	対	静岡市立	勝

初代王座へ激戦必至

90選手参加し24日静岡で

県高校新人柔道個人無差別の部
県立三島高が初代王座へ激戦必至
90選手参加し24日静岡で
県立三島高が初代王座へ激戦必至
90選手参加し24日静岡で
県立三島高が初代王座へ激戦必至
90選手参加し24日静岡で

第10回 全国尚寺子校柔道大会

主催 全日本柔道連盟 全国高等学校体育連盟 全国高等学校柔道選手権放送加盟32社 後援 文部省 東京都



第二十九期生

木村 善一

日本大学三島高等学校柔道部が創部三十周年を迎えることを大変嬉しく思います。

私がこの柔道部に入部したのは昭和62年でした。入部したての頃は良く西島先生に、きびしい御指導をうけましたが、今になって考えると、それが私にとって良かったと思います。くる日もくる日も、柔道に明けくれ、放課後練習をして、家に帰っては、筋力トレーニングなどをしていました。練習では、先生に柔道の技術面はさることながら、人生について、社会についてなど、いろいろなことを学びました。その結果、高校選手権やインターハイ、団体などに出場できましたのも、西島先生のおかげだと思います。

私は今、日本大学の本部柔道部に所属していますが、西島先生に教えられたことを、わずれずに、はやくレギュラーになれますように頑張りたいと思います。

最後に、我が日本大学三島高等学校の一層の発展と活躍を期待しております。



第三十期生



中学時代は全く無名な自分が主将になり、チームを引っ張る存在になれるとは考えてもみませんでした。辛く厳しい練習もありましたが、この三年間の経験を生かし将来、社会に立って恥しくない人間になりたいと思います。

今考えれば、とても永く、辛く、そして一つの事に没頭していた自分が懐かしう思う。この辛い練習を共に耐えぬいたよき友、よき先輩ができた。自分の青春の素晴らしい一ページになると思う。最後に、三年間指導して下さった西島・富田両先生本当にありがとうございます。

松本 和也

辛くて楽しかった坊主頭の三年間で、柔道に関して全くの無知だった自分をここまで育ててくれた西島先生をはじめ多くの先輩方、そしてたくさんのおいしい思い出をつくってくれた柔道部に感謝しています。

朝倉 嘉勇

二年の夏私は部会計を任された。この仕事は大変であるとは分っていたが、予想を上回っていた。選手が良い体調で試合に臨めるようにチームの雰囲気良くするようにしたり。失敗をして先生よりお叱りを受けたりしたが良い経験であった。

植松 一成

自分の高校生活を振り返って見ると部活動を通して非常に充実した三年間だった。練習は辛かったが、多くのことを学んできたと思う。これからも先生や先輩方が教えて下さったことを人生に役立てていきたい。

白井 稔将

三年間の部活動で色々体験することができ、限られた紙面では書ききれない程の思い出を得ることができました。監督の西島外美雄先生、熱心に僕達を御指導下さいまして、ありがとうございました。

杉山 栄二郎

本学での練習の日々を振り返るたびに自分は、「この道場で修業してよかった」と思います。辛く苦しい毎日でしたが、得た数々のものは、かけがえのないものであったと思います。

鈴木 克貴

高校に入ってから三年間、柔道を通じて色々な人との出会いや、様々な思い出を得ることができました。未熟な自分に多くのことを学ばせて下さった西島先生をはじめ影で支えていただいた多くの方々どうもありがとうございました。

村田 建



第三十一期生

創部三十周年そして西島監督おめでとうございます。この記念すべき年に伝統ある日大三島の柔道部の現役として勝負できることを幸福に思います。この一年真剣に練習をして伝統のページを現役メンバーと共に築いてゆきたいと思います。

先輩方の伝統をうけつぎ、主将としてよくまとまったチームに仕上げたいと思います。

栗原 彰 治

先輩方からうけつがれてきた技術を生かしてインターハイ出場を目指して頑張りたいと思います。

福島 光 高

二年生として先輩方に教えてもらった技術を完全なものに少しでも部の為に役立てる様に努力したいと思います。

鈴木 良 直

自分の役目をしっかりと果たし二年生として自覚を持って頑張りたいと思います。

尾 身 彰 隆

マネージャーとして何ができるのか考えながら、最後まで応援していきたいと思っています。

芹 沢 陽 子

直接試合などに関係しない立場ですが、影ながら応援していきたいと思っています。

山 田 和 美



第三十二期生

須賀亮介

日本大学三島高等学校柔道部の創部五十周年、心よりお祝い申し上げます。

私が高校2年生の時に三十周年を迎え、早いもので二十年。この執筆を機に当時を振り返りました。

当時、私は野球部から転部し、また白帯でした。白帯の仲間（通称、白帯軍団）は数人おり、レギュラーメンバーと部員の方々と天と地、又はそれ以上の実力差があった事は過言ではありません。それも当然、初めての柔道でした。しかし、白帯とは言え「日大三島」の文字が胸に刻まれている以上言い訳はできず、その名に恥じぬ柔道と行動を要求されます。一日でも早く黒帯になる、力の差を少しでも縮めたい、柔道部の役に立つためにという思いで必死に稽古に取り組みました。（稽古についていくのが精一杯）受身から教えて頂いた為、先生方や部員には迷惑を掛けたいと思います。しかし、私は大変恵まれた環境で柔道を学べました。

この伝統ある名門柔道部で一から学び、稽古の相手は日大三島柔道部員。この様な素晴らしい環境で稽古が出来た白帯は他に居なかったでしょう。初段を取り、更に式段まで取得出来たことを大変有り難く思い感謝致します。

初めて黒帯を締めた日、日大三島柔道部員として身の引き締まる思いでした。道場に入ると正面に「克己」の文字。精神面においても柔道を通して、多くを学び多くを考えさせられました。

社会に出ても通じる事であり、課題であり続けると思います。今でも柔道部時代の先生方、諸先輩方、同級生、後輩たちは掛け替えのない存在であり、これまでの、そしてこれからの貴重な出会いと経験は私にとっての財産です。

この環境を与えて下さった日大三島柔道部の五十周年にお祝いと感謝を申しあげます。



柔道部

- 全国高等学校総合体育大会 県大会 団体 第3位
 - 71kg以下級 第3位 寺山 育男
 - 95kg以下級 第1位 西條 邦彦
- 全国高等学校総合体育大会 東海大会
 - 95kg以下級 第3位 西條 邦彦



第三十三期生 — 相原 友和

毎日ただ強くなりたい、負けたくない、それだけしか考えていなかったように思います。
三十三期生は、平均体重80kgにも満たない小兵集団でしたが、全国大会出場は厳命であり、練習は常に勝負する心境でなければやり遂げられない厳しさがありました。

当時は、日大三島、沼津学園の2強時代。絶対的な自信を持って挑んだ高校柔道選手権、インターハイは共に県大会決勝で、沼津学園に僅差で敗れました。

静岡県柔道祭優勝。そして個人においてインターハイ、国体出場者を出す事が出来ましたが、団体で全国大会出場を逃がした事は、余りに悔しい結果として私達の胸に残りました。

しかし実社会に出た現在、本当に大切なものは柔道の強さや、競技成績ではないという事を思い知らされることがあります。柔道の究極の目的とは、柔道修行によって心身を鍛錬し、自己を完成し世を補益する(社会の役に立つ)事にあるといえます。私達が、日大三島柔道部の厳しい練習を通じて教えて頂いた事は、目標に向かって努力する習慣、絶対に諦めない強い気持ち、挫折や苦難に立ち向かう勇氣、感謝する気持ち、創意工夫、研究心など、社会に出る上で重要な事ばかりでした。競技成績も然る事ながら、精神面で成長させて頂いた事が一番の収穫だったと確信しています。

五十年の伝統と実績を継承された、日大三島高校柔道部の更なる発展。

そして強靱な精神力を培った卒業生が「日本を変える！」程の力を発揮してくれる事を祈念し、御祝いとさせて頂きます。



伊東 正治 君のお母さん！



インターハイ出場 伊東 正治 君

高校柔道選手権

団体 県準優勝

個人 県準優勝

仲田 剛 (無差別級)

高校総体

団体 県準優勝

個人 県優勝

伊東 正治 (60kg以下級)

個人 県3位

秋田 芳和 (86kg以下級)

植松 信二 (73kg以下級)

仲田 剛 (73kg以下級)

第三十四期生 — 河合将王



高校選手権
団体 県 3 位
高校総体
個人 県・東海優勝
朝波 清治郎 (60kg以下級)



この度は日大三島高校柔道部創部五十周年おめでとうございます。私が高校を卒業し早十六年。今でも時々柔道部での3年間の事を思い出します。入学当初同期は全て有段者、自分だけが白帯。素人同然で柔道を始めた様なものでした。受身から初め毎日繰り返し練習で『3年間続けられるのだろうか』と思った事を鮮明に覚えています。授業が終わる道場に向かう途中部活に所属していない生徒を見ると羨ましかったものでした。毎日の練習、夏合宿、各地への遠征はとても辛かったものでした。しかしながら試合で勝った時はその辛さが有ったからこそ勝てるのだなという喜びも経験出来ました。3年間柔道をやってきた事により肉体的にも強くなりましたがそれ以上に精神的にも成長出来たと思います。社会に出て高校柔道部で経験した事が非常に役に立っております。高校での辛かった3年間を思い出せばどんな困難があろうと乗り越えられる自信です。

長い様で短かった3年間は貴重な経験でした。現在は同期の水口君が監督をされていますので私も陰ながら柔道部をサポートしてまいりたいと思います。日大三島高校柔道部の益々のご発展をお祈りいたします。

第三十五期生 — 岡本 謙治

監督業

五十年以上もの歴史ある柔道部の卒業生として、現在誇りに思うとともにそれを汚さぬように柔道に携わってまいりたいと思います。いくつかの思い出がある中で挙げるとすると、私学大会を思い出します。私の対戦相手は195cm、135kgの巨漢選手であり、180cm、71kgだった私にも壁のように思えました。1年生大会で敗れている相手でもあり試合を組み立てようにも頭の中は混乱を極めていました。次が私の番になったときに西島先生に呼ばれました。「内股透かしでいけ。」試合開始と同時に掛けてきた相手の内股を透かすと主審の右手は高々と上がりました。開始6秒での一本勝ち。

現在私は、沼津市の加藤学園高等学校で教鞭を執る傍ら柔道部の監督として柔道に携わっています。選手の試合前は眠れぬ日々があり、選手を伸ばしてあげたいと頭を悩ませ、選手勧誘では身体を壊しと、きつい監督業であります。しかし、選手が勝ってくれることは自分の試合の勝ちよりも数倍も嬉しいものであり、その一瞬のために苦しさも乗り越えられるのです。西島先生のたった一言の言葉を胸に試合に勝てたこと。今後は私の一言で選手に勝たせてあげられるように、日々勉強です。加藤学園高校は母校日大三島高校と勝負できる位置にまでくることができました。土田先生、水口先生の胸を借り、応援して下さいさる諸先輩方に対しても、勝つことこそ恩返しという思いで今後も邁進していく所存です。



第三十六期生



原 卓 広
伊 東 栄 治
浅 倉 将 人
尾 身 亜 矢
庄 司 惠 理

第三十七期生



川口 剛弘
 稲垣 浩三
 杉山 哲彦

第三十八期生



富原 学
宮沢 俊介
渡辺 明日香



後藤 大輔
岡本 隆史
村上 淳
梶 芳臣

第四十期生 — 杉山靖典

高校三年間を振り返って

私達の学年のメンバーは、5人中4人が73kg以下
の選手で小柄な選手ばかりでした。それに加えて、身体
能力が特別に優れているという者もないので、東部大会
上位を狙うのも厳しいのではないかと思うほどでした。

入学当初は練習についていくだけでもやっとの状態。
練習の厳しさに耐えていく自信が無く、何度か部活を辞
めてしまおうかと思ったものでした。

この様な状態の中でもお互いに励まし合い努力した結
果、先輩方が引退された後も、なんとか地区大会で上位
の成績を残す事が出来ました。

また3年次には、春の東部柔道祭で団体戦優勝という
好成績を残すことが出来ました。これも、西島監督と石
巻コーチに厳しくも熱心にご指導をして頂いた結果であ
ると思います。

また、「厳しい練習を3年間続けられた」という自信が、
「今後様々な辛い事に会っても堪えることが出来る」
という確信にもなりました。

今の自分にとって、日大三島高校柔道部での3年間が、
非常に有意義なものであったと思います。

在校生の皆さんも練習は厳しく辛いものと思いますが、
現監督・コーチの土田先生、水口先生を信じて練習に励
んでもらいたいと思います。



●平成12年度

高校総体柔道 勝間田健太 (73kg級) 県準優勝 東海3位
白岩 和馬 (66kg級) 県3位



第47回総合体育大会柔道競技県大会
個人 第3位

角田 憲保 (73kg以下級)

第34回全日本ジュニア体重別柔道選手権大会
県大会 個人 準優勝

角田 憲保 (73kg以下級)

第四十二期生 — 真野 智幸

柔道部創立五十周年おめでとうございます。

私達の時代は西島外美雄先生が最後にもう一花咲かせたいということで静岡県東部の生徒が5人集まりました。最終的には団体戦ではインターハイ出場はなりませんでしたが、個人戦では室伏君が81キロ級でインターハイ出場を果たしました。諸先輩方のように華やかな戦績は残すことが出来ませんでした。西島先生、石巻先生の厳しい指導は肉体的にも精神的にも鍛えられ、卒業してからもとても役立ちました。結果を残せなかった事は今でも悔いが残っていますし、西島先生・石巻コーチにはあまりいい思いをさせる事はできなくて申し訳ないと思っていますが、3年間日大三島柔道部で柔道ができて厳しかったけれども楽しかったです。

最後に、西島先生、石巻コーチだけではなく、試合の度に車を出して選手を試合場まで送っていただいたり、合宿の度にご飯を用意していただきました父母会の皆様に御礼をしたいと思います。自分自身が働いてみて初めて、休みの度に練習や試合を見に来たり、送り迎えをしたりという当時の私達には当たり前にしか思わなかったことの大変さをとても感じています。ありがとうございました。

第24回全国高等学校柔道選手権静岡大会

団体 3 位

個人 準優勝 真野 智幸（無差別級）

第48回総合体育大会柔道競技東海大会

個人 3 位 室伏 弘己（81kg以下級）全国出場

第48回総合体育大会柔道競技県大会

個人 準優勝 真野 智幸（90kg以下級）

個人 準優勝 加藤 貴行（100kg超級）

第35回全日本ジュニア体重別柔道選手権大会

県大会 個人 優勝 室伏 弘己（81kg以下級）

東海大会 個人 3 位

県大会 個人 優勝 真野 智幸（90kg以下級）

東海大会 個人 2 位

県大会 個人 3 位 加藤 貴行（100kg超級）



全国高等学校総合体育大会
 県大会準優勝・東海大会第3位
 室田 浩市 (90kg以下級)

全日本ジュニア静岡県大会
 第3位 室田 浩市 (90kg以下級)



第四十四期生



原 井 直 人
鈴 木 宏 延
喜 澤 将 志

第四十五期生 — 志村 匠 巳

柔道部創立五十周年おめでとうございます。

この期の代表として書くことになりました志村です。代表といっても私達の代は、自分ともう一人、斉藤法成君の二人しかおらず歴代の柔道部の中でも少ない人数でした。そこで今回は二人の思い出を私からの目線で書いていきたいと思います。

私↓私の思い出は、なんといっても西島先生です。西島先生は私達の代の時はすでに教師生活を引退されていました。しかし、普段の練習をはじめ連休などの合宿や試合等をよく見に来られていました。

ある合宿のできごとです。練習も終盤に差し掛り西島先生の指導のもと仕上げの技の研究をしていました。研究の最中に葦山のOBのかたが葦山のイチゴを差し入れに持ってきてくれたのです。それを見た西島先生がなにを思ったのか研究を止めてロープを登れと言いはじめたのです。普段から練習の後に登り慣れている私は意気揚々と部員の誰よりも率先して登ったのです。誰よりも早く登り西島先生が指示した十本をやり、西島先生に報告をしに行くと言てなかった。もう十本登ってこい」と言いさらに指示を出したのです。渋々とロープを登りなおし報告に行くと言てなかった。もう一回登ってこい」と何本も何本もロープを登らされました。やっと西島先生からOKがでる頃には両手の皮がむけ手の感覚がない状態でした。その後、西島先生が言った一言が「一番頑張った志村に褒美をあげよう。」と言った西島先生の手にはイチゴが一パック。私が心を躍らせながら受け取りに行くと言「ほれ、イチゴ一つな」うれしかったです。でも正直言うと言と後ろにあと何パックもあるんです。その中の一つパック私にくれてもいいじゃないですか。っという思い出です。

斉藤君↓きつと斉藤君の思い出と言ったらこれが第一位にあがるでしょう。これというのは、そうそれです。柔道部員の誰もが一度は経験をする耳に血がたまり腫れる餃子耳です。なぜ斉藤君餃子耳かというと言と大体大でやっている若獅子杯という大会に参加したときのことです。当時、斉藤君は両耳が餃子耳になっていて片方は固まっていたのですがもう片方の耳はまだやわらかい状態で試合をやっていました。

若獅子杯が終り、残った時間を使い参加チームでグループ分けをして強化試合をやっていたときのこと、斉藤君が最後の試合で試合中周りで観戦していた他のチームの人の膝にやわらかいほうの耳をぶつけてしまったのです。耳が当たったズボンは血で真っ赤に染まり下の畳も赤く血の海の様になっていました。すぐに試合を中止し病院に運びました。斉藤君は、麻酔を打ち破けた患部を縫ったらしいです。しかし、麻酔が効く前に縫い始めたらしく、斉藤君曰く耳をぶつけて破裂した痛みよりも耳を縫うほうが痛かったらしいです。

またまた、書き足りないですが今回はこのへんにしときたいと思います。また機会があったら書きたいと思います。



高校総体 個人県 第3位 志村 匠 巳 (73kg以下級)

第四十六期生——津山 哲

柔道部主将 津山 哲

柔道部創立五十周年おめでとうございます。

我が四十六期は四人という少ない人数でしたが
頑張ってきました。

練習嫌いながら試合では頼りになる飯田康介

真面目で人一倍練習熱心な岩崎裕人

チームのムードメーカーで不屈の精神の関裕二

この個性豊かなメンバーをまとめ

先輩方の築いてきた伝統を守るために

努力奮闘の二年間でした。

私は主将を努めていましたが、腰を手術したため

試合に出る事はできませんでしたが、

土田先生、水口先生とチーム一丸となり

高校選手権で県ベスト8まで残る事ができました。



全日本ジュニア 県予選 準優勝 飯田 康介 (100kg以下級)

第四十七期生 — 植松輝明

私たち四十七期生は五人でしたが、全員が柔道未経験者からのスタートでした。帯の結び方から、受け身、柔道の基礎練習など、一から学び、先生方、先輩たちに、大変な迷惑をかけた期でもありました。練習が辛く、逃げ出したくなる時も何度もありましたが、全員で三年間最後までやりきり、大会で良い成績を残すことが少なかったですが、充実した三年間でした。高校時代に努力したことは、現在の自分たちの大きな財産となっており、一緒に最後まで努力した仲間や、先輩、後輩、そして先生方には大変感謝しています。

日大三島高校柔道部では卒業生の方々が、暇を見つけては稽古に駆けつけてくれるなど、現役の選手達に対する卒業生の思いが強く、私達が現役の時も、多くの卒業生の方々が稽古に訪れてくださるなど、本当に縦の繋がりが深い柔道部であると思います。これからもよい伝統は継続し、悪い部分を改善してより一層の柔道部の発展を願っています。



第四十八期生

齊藤友保



《柔道部》

眞人 樹 保 諒 輔 人 平 明 透 生
 崇 澄 直 友 公 俊 健 直 康 田 信
 木 崎 村 藤 原 澤 井 藤 野 林 保 田 信
 青 岩 吉 齊 梅 西 藤 齋 丹 竹 久 土 水 芹



高校総体 個人県 第3位
 齊藤友保 (81kg以下級)
 丹野直人 (66kg以下級)

柔道部創立五十周年おめでとうございます。
 二年前に高校を卒業したのを、もう昔に感じるほどで大学生活にも慣れ、日体大柔道部として日々汗を流しています。高校時代を思い出してみると、同期の人が十人で部員が多く入った年でした。同期生はほとんどが初心者で、道場の端で受け身の練習をしていたのを今も覚えています。そして、女性のマネージャーが入ったのもその年でした。先輩も初心者から初めた人達で少し不安な気持ちもありました。それでも一人一人が真剣に練習に取り組んでいて、その不安もすぐに消えてしまいました。
 一番覚えていた試合は、三年生が引退してすぐの工藤杯です。先輩達と自分達の新チーム初めての試合。予選リーグから決勝リーグの二回戦まで自分の中に不安はなく、先輩達の試合も自信を持って見れていました。そして準決勝、富士宮北との試合、自分は大将で試合に出場し気合いも入りしっかりと先輩達の試合を見ていました。先鋒戦は一本負け、次鋒戦も一本負けし、中堅戦は当時のキャプテン植松先輩が一本勝ちをし、副将戦は引き分け、ここで自分の出番がきました。一本勝ちで代表戦、自分が試合場に向かう前に先輩達から「まかせたぞ」と言われ不安もプレッシャーもなくなり一本勝ちをして、代表戦。代表は自分、そして相手は、百四十キロの巨漢、それでも自分を信じてくれているチームメイトの為、自分がヒーローになる為に一本を取りに行き、そして一本勝ちをしました。新チームとして初の決勝、でも決勝では負け二位という結果に終わりました。二位と一回戦負けは同じという人もいますが、この試合が自分達にとって大事な大会だったと思います。そして先輩達も引退し自分達にとって最後のインターハイ、自分は県優勝を目指して練習はしてきましたが、結果は三位で三年間三位という結果で終わりました。
 高校三年間という短い間に多くの思い出があり、一年の宝となるものを多く学ぶことができました。また正月や夏に静岡に帰った時色々な人と練習をしたと思います。

第四十九期生 ——— 山 本 憲

「柔道部創立五十周年おめでとうございます。」とは言っても、正直、第四十九期生の私としては、つい最近まで自分が選手として柔道に励んでいたののでその実感があまりありません。(笑) 私たちのために日々支えてくれた先生方や御父兄の皆様、お忙しい中稽古をつけに来てくれたOBの方々、その他多くの方々に心より感謝して申し上げます。

私たちの期では、ここ何年も日本大学三島の名が全国大会に載らないことから、再び日本大学三島の名が全国に轟くことを目標に日々努力してきました。毎日が厳しい稽古で何度も何度も辞めたいと思うことがありましたが、常に部全体が一丸となり、互いに励ましあいながら、「克己」の如く自分に打ち克とうと日々稽古を努力してきました。結果としては、過去の先輩方の輝かしい栄光には程遠いものとなってしまうましたが、私は結果よりも部全体が一丸となって日々の稽古に励んでいたことのほうが何よりも輝かしいものであると思っています。

結果こそが総てと言われてしまえば、何も言えなくなってしまうが、やはり仲間と過ごしてきた時間を私は大事だと思う。現役時代はきつく辛い日々であっても、引退すれば何よりも楽しい日々であったと思えるから、後輩たちもそう思えるようにこれから辛くきつい日々が待ってるかもしれないが、「克己」を常に意識して稽古に取り組んでほしい。そして、私たちの期では達成することのできなかった「全国大会」へ上り詰めてほしい。

最後に私は、選手として全国へはいけなかったが、次は顧問として全国大会を目指したい。



柔道部

山 本 憲
山 本 耕 成
齋 藤 浩 太
重 黒 木 悠 生
山 本 一 菜 美
土 田 信 明 先生
水 口 透 先生
柴 原 桂 先生

全日本ジュニア県予選 個人 第3位 山本 耕成 (66kg以下級)

第五十期生

日大三島柔道部に入部してからいままでこの仲間やってこれてよかったと思います。最初はなかなか思うような結果がついてこなくて、悔しい思いをしてばかりでしたが、最後にチームとしてIH団体ベスト8に入った時はとても嬉しかったです。自分一人ではできなかったことも経験できました。本当に仲間にはありがとうと言いたいです。練習に来てくださったOBの方々にも感謝しています。自分はこの日大三島柔道部の雰囲気が好きで、後輩達もいつながりを作ってほしいです。

石井都百希

私は最初、大嫌いでした。ただただつらいし、先輩たちには、おこられるし、いやな事ばかりでした。しかし、ひよんなことから柔道が好きになりました。そこから私の柔道人生は変わりました。そこから試合で勝てるようになりました。私は気づいたのです。私の周りには、とても信頼できる仲間がいる、ついてきてくれる後輩がいることに、それから言うもの柔道が楽しくなりました。これから大学へ行っても柔道を続けようと思うので周りに感謝を忘れず、がんばっていきます。

杉山 昂之

柔道部に入って、辛い事や大変なことが多くあったが、その分手に入れたものも多かった。中学生までの自分は辛いことや苦しい事からは逃げてばかりで、やってきませんでした。しかし、柔道部では辛いことがあっても逃げることはできず、立ち向かうしかありませんでした。そのおかげで、多くの辛く苦しいことを体験し、打ち勝つことで、強い心と体を手に入れることが出来ました。大学に行ったらきつと自分が思いもしないような事がおきるかもしれないので、柔道部での事を思い出してがんばりたいです。最後に柔道を教えてくれた先生方と先輩方と自分を支えてくれた後輩の全員に感謝の気持ちを送りたいです。

秋山 光司

素人で始めた自分がここまで続けられたのは同期の仲間であり支えてくれた後輩でありましたが、一番はケガをしたときも最後まで見守ってくれた先生方です。

田中 彰一

自分がこの柔道部に入り、得たものは多い。例えばあいさつである。目上の方には必ずあいさつをする。という意識がで始め、自然と学校の先生や近所の方々にもあいさつができるようになった。もしも自分がこの部活に入っていなかったら全然できなかったことだろう。もう一つはどんなに辛いことも挑戦しあきらめない心。これにはいろいろな場合で助けられて、今も尚自分の内面にも色濃く存在し続けているものである。目には見えなけれどもできるのも、確かに自分という人間を内から変えているものでもあると思う。でもこれらができるのも先生方がいて、後輩たちがいて、家族がいて、自分が成り立っているから、自分の周囲の人には大きな感謝の気持ちがある。自分は人間は一人一人がつながっているから大学へ行っても、大人になってもこの柔道を通して分かったこと、気付いたことを忘れずに成長できたらいいなと思いました。

岩田 宙



全国高等学校柔道選手権大会 個人 第5位 石井都百希 (81kg以下級)
 全国高等学校柔道選手権大会 県大会 個人 優勝 石井都百希 (81kg以下級)
 高校総体 県大会 個人 優勝 石井都百希 (81kg以下級)
 東海大会 個人 第3位 石井都百希 (81kg以下級)

第五十一期生

この50年間の伝統を受け継ぎ、歴代の先輩方に負けないようにこれからも努力していきたいです。そして、51期生主将としてしっかりとチームを一つにまとめていき、目標とするインターハイに出場出来るように日々努力していきたいです。

主将 伊奈慶貴

僕は51期生副主将として主将のサポートをし、先輩方から良いアドバイスを頂きそれを実行します。そして、古豪復活を目指し日々練習に精進していきたいと思っています。

副主将 佐野勝平

僕は高校から柔道を始めましたが、中学生の時から柔道をやっている人に勝つために一日一日に目標を持ち練習をしつかり取り組んでいきたいです。

会計 福永拓人

僕はスポーツクラスの人間として個人戦でしっかりと結果を出し、団体戦ではしっかりとチームに貢献してみんなでインターハイ優勝を目指して努力していきたいです。

寺坂英希

自分は、この伝統ある柔道部に入り心身ともに強くなれるよう、日々練習に取り組んでいます。これからも、強くなるために目標を持ち努力していきます。

手老 裕介

自分の目標は、インターハイに出場することです。そのためには日々の稽古を充実させ、一生懸命取り組んで強くなつていきます。

トレーニング長 道場 文也

僕は、残りの限られた期間のなかで、毎日の練習の中で目標に向かって日々練習に取り組んでいます。そして、一番の目標であるインターハイを目指していきます。

指揮・号令 勝又 諒

僕は3年生という最終学年になり残り少ない高校生活を今まで以上に時間を惜しみながら過ごしていきたい。そして後悔の残らないように一生懸命努力していきたいです。

上野 豪士



自分は、確実に階段を一段一段上り個人では、県優勝そして全国制覇できるようにしたいです。

また団体で自分がポイントゲッターになり、チームの戦力になれるように日々の練習に耐えて少しずつ強くなっていきたいです。

原 優

僕は、日々の練習で1つ1つ目標を持って個人戦で結果が出せるように練習に取り組み充実した高校生活がおくれるように頑張っていきたいです。

今井 亮輔





日本大学三島高等学校柔道部